

南割遺跡

一般国道153号伊南バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

飯島町教育委員会

南割遺跡

一般国道153号伊南バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

飯島町教育委員会



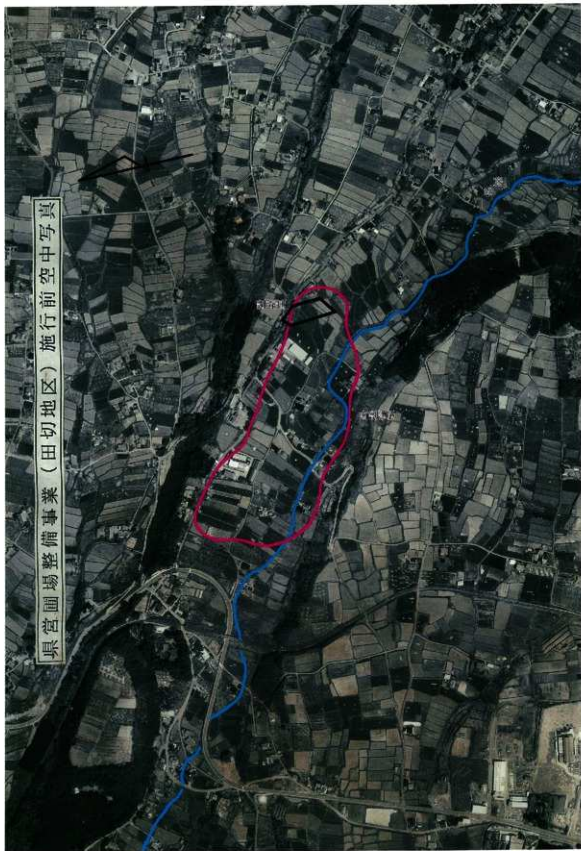
1号住居址出土土器



1号住居址出土土器



土 俣



県営圃場整備事業（田切地区）施行前空中写真

圃場整備前の空中写真(昭和46年)でみる南割遺跡

発刊にあたって

飯島町では近年公共事業などが減少し、以前に比べて発掘調査の機会はずいぶん少くなりました。今回の南割遺跡の調査で見つかったのは縄文時代の住居跡や土器・石器・土偶などですが、久しぶりの成果でしたので、現地見学会でも大勢の皆さんが熱心に見学され、地域の文化財への関心を高めることにつながったように思われます。

猛暑の年の厳しい残暑のなかで開始した調査です。表土を剥いてみると予想以上に石が多く、調査員・作業員の皆様にはたいへんご苦労をいただきました。また、地元の皆様にも多大なご理解・ご協力を賜り、専門的な立場からのご指導・ご助言も多くの方から賜りました。関係各位に心から感謝申し上げます。


現地調査から整理作業、報告書の刊行までを半年間という短時間でこなったため、十分な検証ができなかったところもありますが、今後の研究の布石として本書が一助となれば幸いです。

飯島町教育委員会

例 言

- 1 本書は、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所が所管する国道153号伊南バイパス建設工事にもない、平成22年度に実施した南割遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所より飯島町教育委員会が委託を受けて実施した。
- 3 遺跡の地形環境については寺平 宏氏に調査を委託した。また、以下の作業は各事業者に委託した。
表土除去及び安全管理作業等：朝久保田組 空中写真撮影：R C U房スカイクリエイト
石器図化：朝シン技術コンサル 有機物分析：朝パレオ・ラボ
- 4 発掘調査および報告書作成に際し、以下の諸氏、諸機関からご指導・ご協力を賜った（五十音順）。
伊藤 修 小池 孝 小林文彦 坂井勇雄 下平博行 福島 永 朝長野ミツバ
野代恵子 野代幸和 三上徹也 村松 武 森谷栄一 綿田弘実
- 5 本文の執筆者は目次に記した。
- 6 本調査の出上品・記録類は飯島町教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 遺構・遺物図中の指示はつぎのとおりである。
 - ・遺構図版中の水糸レベルは海拔高を示し、単位はmである。
 - ・遺構図版中のスクリーントーンは焼土範囲、は火を受けた痕跡のある石を、ドットマークは土器分布状況を示す
 - ・方位は楨北を示す。
 - ・遺物図版（土偶）中のスクリーントーンは有機物付着範囲を示す。
 - ・遺物図版（磨石）中のスクリーントーンは擦り面を示す。
 - ・遺物番号は本文・挿図・表ですべて一致する。

本文目次

発刊にあたって

例言

凡例

第1章 調査の経過と体制 —————	(丸山浩隆)	1
1 調査に至る経緯	1	
2 調査体制	1	
3 調査の経過	1	
第2章 遺跡の位置と環境 —————		5
1 遺跡の位置と概要	(丸山浩隆)	5
2 周辺の地形環境	(寺平 宏)	7
3 歴史環境	(丸山浩隆)	10
第3章 調査の方法 —————	(米山妙子)	13
1 調査の方法	13	
2 基本的層序	14	
第4章 検出された遺構と遺物 —————	(米山妙子)	17
1 概 要	17	
2 竪穴式住居址	17	
3 土 坑	25	
4 遺構外出土遺物	39	
第5章 調査の成果と課題 —————	(米山妙子)	45
1 南割遺跡における縄文時代中期中葉の土器様相について	45	
2 土坑について	46	
3 1号土坑出土の土偶について	46	
付編 土偶付着黒色物の材質分析 —————	(関バレオ・ラボ)	51

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧	11	表3 石器計画表	49
表2 土坑一覧表	48		

図 目 次

図1 発掘調査地 (1/2,500)	4	図23 1号土坑出土土偶 (1/2)	25
図2 遺跡の位置 (1/50,000)	5	図24 5号土坑・出土遺物 (1/20・1/3)	26
図3 開場整備前の空中写真(昭和46年)と今回の調査地	6	図25 南東土坑群 (1/80)	27
図4 陣場形山から見る田切方面の地形	7	図26 7号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	27
図5 中田切川左岸の扇状地礫層	7	図27 10号土坑 (1/30)	28
図6 田切駅東の扇状地礫層	7	図28 11号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	28
図7 中田切川左岸の中田切川テフラ	7	図29 15号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	29
図8 中田切川テフラの鉱物	8	図30 16号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	29
図9 田切方面の段丘面区分図	8	図31 27~31号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	30
図10 約10万年前に飛来した御嶽の軽石	9	図32 40号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	31
図11 追引の始良 T n テフラ (AT)	9	図33 41~43号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	32
図12 周辺の遺跡 (1/30,000)	11	図34 44号土坑・出土遺物 (1/40・1/3)	33
図13 調査区 (1/1,000)	13	図35 南東土坑群・出土遺物 (1/30・1/3)	33
図14 基本的層序	14	図36 南東土坑群 (1/30)	34
図15 遺構配置図 (1/200)	15・16	図37 南西土坑群 (1/80・1/30)	35
図16 1号住居址・炉址 (1/60・1/30)	19	図38 南西土坑群・出土遺物 (1/30・1/3)	36
図17 1号住居址遺物出土状況 (1/30)	20	図39 51~53号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)	37
図18 1号住居址出土遺物(1) (1/3)	21	図40 52号土坑出土土偶 (1/2)	38
図19 1号住居址出土遺物(2) (1/3)	22	図41 遺構外出土遺物(1) (1/3)	39
図20 1号住居址出土遺物(3) (1/4・1/3)	23	図42 遺構外出土遺物(2) (1/3)	40
図21 1号住居址出土遺物(4) (1/3)	24	図43 石器(1)	41
図22 1号土坑 (1/20)	25	図44 石器(2)	42
		図45 石器(3)	43

図 版 目 次

巻頭図版1 1号住居址出土石器	図版1 調査区全景
巻頭図版2 1号住居址出土石器 土偶	図版2 (1) 1号住居址 (2) 1号住居址完掘
巻頭図版3 開場整備前の空中写真(昭和46年) でみる南割遺跡	図版3 (1) 1号住居址遺物出土状況 (2) 同 出土遺物

- 图版4 (1) 同 出土遺物
(2) 同 3号炉内遺物出土狀況
- 图版5 (1) 同 炉周边遺物出土狀況
(2) 同 炉完掘
(3) 同 1号炉
- 图版6 (1) 1号土坑
(2) 同 土偶出土狀況
(3) 5号土坑
- 图版7 (1) 南東土坑群確認狀況
(2) 南東土坑群確認狀況
- 图版8 (1) 南東土坑群
(2) 南東土坑群
- 图版9 (1) 7号土坑
(2) 10号土坑檢出狀況
(3) 同
- 图版10 (1) 11号土坑
(2) 15号土坑(左)·16号土坑(右)
(3) 15号土坑
- 图版11 (1) 16号土坑 上面
(2) 同
(3) 27号土坑周边
- 图版12 (1) 27号土坑周边
(2) 27号土坑
(3) 40号土坑周边

- 图版13 (1) 43号土坑 集石
(2) 同
(3) 44号土坑断面
- 图版14 (1) 南西土坑群
(2) 同 檢出狀況
- 图版15 (1) 52号土坑檢出狀況
(2) 同 遺物出土狀況
(3) 同 出土遺物
- 图版16 (1) 52号土坑出土遺物
(2) 同 断面
(3) 49号土坑
- 图版17 1号住居址出土土器
- 图版18 1号住居址出土土器
- 图版19 1号住居址出土土器
- 图版20 1号住居址出土土器
- 图版21 土坑出土土器
- 图版22 土坑出土土器
- 图版23 土坑出土土器
- 图版24 土坑出土土器·土偶
- 图版25 遺構外出土土器·石器(石鏃·加工剝片·石匙)
- 图版26 石器(打製石斧·磨製石斧)
- 图版27 石器(横刃形石器·石鏃·磨石·石皿)

第1章 調査の経過と体制

1 調査に至る経緯

国道153号伊南バイパスが、周知の埋蔵文化財包蔵地である南制遺跡の範囲内を通ることとなり、平成14年から飯田国道事務所・長野県教育委員会・飯島町教育委員会の3者によって毎年協議が重ねられた。しかし、遺跡の破壊は避けられず発掘調査を実施することとなった。着工の見通しが立ってきた平成20年度から協議を本格化させた。

- 平成21年1月16日 飯田国道事務所・長野県教育委員会・飯島町教育委員会で協議。
- 平成21年10月7日 飯田国道事務所と飯島町教育委員会で協議。
- 平成21年12月4日 飯田国道事務所・長野県教育委員会・飯島町教育委員会で協議。当該地では昭和54年に圃場整備がおこなわれている。圃場整備で削れなかったと思われる箇所を中心に試掘することも考えられたが、その正確な範囲は不明だったため、この日3者で現地を確認し、明らかに圃場整備によって当時の地形が深く掘り込まれた圃場以外の全域を発掘調査することとなった。
- 12月9日 飯田国道事務所から長野県教育委員会に文化財保護法第94条1項の通知。
- 平成22年1月5日 長野県教育委員会から発掘調査許可の通知。
- 2月10日 飯田国道事務所に実施計画書を提出。
- 9月3日 国土交通省中部地方整備局と埋蔵文化財調査委託契約を締結。

2 調査体制

[事務局 飯島町教育委員会]

教育長：山田敏郎 教育次長：浜田幸雄 生涯学習係長：湯沢範子

調査担当者 丸山浩隆（生涯学習係主査）

調査員 太田 保 三浦孝美 米山妙子

現場作業員 横山和司 鈴木広尚 植田尚美 宮沢聡子 小林 要 伊藤邦人 伊藤護夫

井口裕美 飯島 紘 小林健一 小池めぐみ 伊藤佳雄 元木 忍

整理作業員 竹内みどり 村上茂子 早川裕美子 大森淑子 板倉裕子

3 調査の経過

当初、平成22年5月に現場調査を開始する予定だったが、周辺が水田であるため調査地に水が漏れ出すことが懸念され、調査開始を9月に延期した。

平成22年9月6日 発掘作業開始。重機による表土除去作業。表土直下はすぐに川原のような礫層



9月6日 表土除去開始（表土直下に礎）



9月6日 I区西側トレンチ作業風景



9月9日 I区南東隅作業風景



9月13日 II区南東側作業風景



9月29日 II区南東隅作業風景



10月5日 II区南西隅作業風景



10月7日 1号住居跡作業をケーブルテレビ撮影



10月22日 1号住居跡作業風景

- となる。西端にトレンチを入れる。
- 9月9日 I区西トレンチ南端付近で竪穴住居跡を確認、1号住居址とする。同所から縄文中期中葉の土器底部出土。
- 9月10日 I区南西側で浅い舟底状のピットから土偶の胴部・臀部が出土。土坑が削平されて底部しか残っていなかったものが。
- 9月16日 I区・II区の表土除去がほぼ終わる。I区は南西隅、II区は南西隅と南東隅のみにロームが載っている。
- 9月17日 調査地に測量基準杭設置。
- 9月21日 西側トレンチ断面図作成。この日以降I区・II区で遺構検出作業。
- 9月29日 II区に土層観察・排土置き場・排水のためにロームの載っていない層層にトレンチを入れる。II区南東隅で土坑を多く確認。II区南東土坑群と呼ぶ。土坑群には礎が置かれている土坑が多く、竊賊の可能性を念頭に置く。II区南西隅は竪穴住居跡かと思われ2号住居址とする。
- 9月30日 III区の表土剥ぎ終了。削平されていて望みなし。
- 10月1日 寺平宏氏、地形地質調査。
- 10月5日 II区南東土坑群の半截。この日以降、地元ケーブルテレビ局が番組用に撮影。
- 10月7日 II区南東土坑群ほぼ完掘。1号住居址、2号住居址の掘り下げ。ともに土器や礎が多い。
- 10月12日 1号住居址からはほぼ定形でもろい深鉢を確認。つぶれた状態。廃棄されたものらしい。2号住居址からは土偶の臀部と足が出土。
- 10月16日 遺跡見学会開催。町内を中心に80人來場。
- 10月18日 住居址の遺物取り上げ。2号住居址としていた部分を掘り下げたところ、竪穴住居ではなく土坑群と判明。
- 10月20～22日 天候悪いが様子を見ながらRCヘリで空中写真撮影。
- 10月24日 田切区育成会遺跡見学。
- 10月29日 現場作業終了。撤収。
- 11月2日～ 整理作業、報告書作成作業。



10月16日 遺跡見学会（II区南東土坑群）



10月16日 遺跡見学会（遺物）

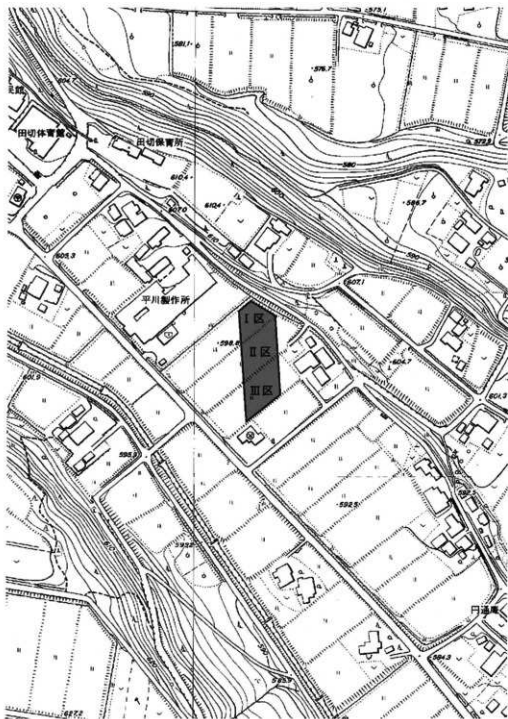


図1 発掘調査地 (1/2,500)

第2章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と概要

(1) 遺跡の位置

南割遺跡は、長野県上伊那郡飯島町田切区にある。飯島町は長野県の南部、伊那谷のほぼ中央に位置する。田切区は天竜川の右岸（西）で、飯島町域のうちでは最も北に位置し、西にそびえる中央アルプスから天竜川に流れ込む中田切川を境に駒ヶ根市に接している。

調査地はJR田切駅から東南東800mに位置し、藤巻川に沿う南割遺跡のうちでは東端に当たる。地番は飯島町田切2630-1、2628-10、2628-11、2628-8、2627-2番地、標高は597mである。



図2 遺跡の位置 (1/50,000)

(2) 遺跡の概要

南河遺跡は国道153号東から藤巻川に沿って長さ600m、幅200mほどの範囲に及ぶ（巻頭図版3）。これまで発掘調査はおこなわれていないが、縄文土器や石器が多く出土したといわれ、集落跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されている。しかし、大部分が昭和54～56年の県営圃場整備事業やそれ以前に建てられた工場建設などで消滅している。

遺跡全体は南東方向の天竜川および藤巻川に向かって緩やかに傾斜している。今回の調査地の現況は図1のとおり天竜川方向に並ぶ3枚の水田だが、圃場整備前の空中写真と照らし合わせると10枚以上の水田にかかっている（図3）。

今回の調査の結果、調査地の大部分は圃場整備によって攪乱されていたが、Ⅰ区南西隅、Ⅱ区南東隅、Ⅱ区南西隅の3箇所にはロームが載っていて遺構が検出された。圃場整備前の写真に重ねると、Ⅱ区南西隅はⅡ区のうちでは最も低かった圃場と見え、圃場整備で削られなかった水田だったことがうかがえる。一般に圃場整備で何枚かの水田の段差をなくして大きな1枚の圃場にするとき、高い水田を削って低い水田を埋める。当地では北の田を削り南の田を埋めることが多かったと思われる。ロームが残っていた残る2箇所も現況の大きな圃場のうちでは南端でありこのことに符合するが、圃場南辺中央に残っていない理由はわからない。

削平を免れた部分から密度濃く遺構が検出されたことになり、かつての南河遺跡はかなりの数の遺構・遺物が眠る遺跡だったと推測される。大部分が消滅していることが悔やまれる。



図3 圃場整備前の空中写真（昭和46年）と今回の調査地

2 周辺の地形環境

(1) 地形概観

飯島町田切地域には、屏風のようにそそり立つ木曾山脈の東側に、彫刻刀で刻まれたような複雑な地形が広がる(図4)。

扇状地などが河川により深く侵食された結果、河床の低地や崖によって分断された地形は「田切地形」と呼ばれ、日本各地に存在するが、特に伊那谷のものは有名であり、その典型的なものがこの田切地区の地形である。

この地形の生い立ちは以下のとおりである。

(2) 木曾山脈の誕生と中田切川扇状地の形成

下伊那郡松川町母尾に、木曾方面から運ばれて来た「濃飛流紋岩」の河床礫が堆積している。この礫層はおよそ300万年前のものと考えられ、その当時は木曾山脈がなかったと推定されている。

その後木曾山脈が隆起を始め、この地域には中田切川などによって運び出された砂礫が厚く堆積した。この様子は中田切川左岸の崖(図5)で観察される。また、礫が西から東への水流によって運ばれた様子は、田切駅東方の礫層で観察される(図6)。

礫の種類は花崗岩や片麻岩などで木曾山脈の岩石である。また礫の傾きの方向から考えられる当時の水流は、図7の中の矢印のように西から東への方向を示している。このような礫の構造はインプリケート構造と呼ばれている。この礫を供給した木曾山脈は、いつ頃から隆起を始めたのだろうか。その証拠の一つである火山灰層が平成18年7月の豪雨災害により、田切地区の中田切川右岸で発見された(図7)。このオレンジ色の地層は図8のように扇状地をつくる砂粒とは異なり、結晶の粒の集合体である。角閃石や磁鉄鉱の多いことから火山噴出物であり、しかも鉱物の大きさから近くの火山から飛来したものと思われたが、正確な噴出源や年代は明らかでなかった。

その後、竹下欣宏ほかは角閃石の精密な分析等によりこのテフラ(火山灰や軽石などをテフラと呼ぶ)が御岳火山からおよそ60万年前に飛来したものであるこ

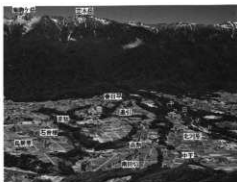


図4 陣場山形から見る田切方面の地形



図5 中田切川左岸の扇状地礫層



図6 田切駅東方の扇状地礫層

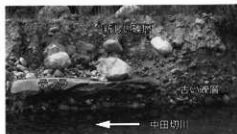


図7 中田切川右岸の中田切川テフラ

とを究明し、この結果を2009年の日本地質学会第116年学術大会で発表した。これにより、図7の扇状地礫層の堆積した年代が約60万年前のものであることが分かった。

周辺の礫層の調査からこの地域の礫層はこれより上方に約50m堆積している。また礫層の堆積は約10万年前に終了している（後述）ことから、この地域の礫層はおおよそ50万年間に50m堆積したことになる。もちろん堆積速度は一定ではないのであくまで推定であるが、この地域における扇状地礫層の堆積速度は、礫層1mの堆積に約1万年と推定される。なお、テフラ層の下方に約20mの礫層が堆積していることから扇状地礫層が堆積を始めたのは、60万年前より更に20万年古い、約80万年前と考えられる。

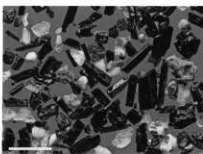


図8 中田切川テフラの鉱物
黒色長柱状の角閃石が目立つ
(左下の白線は1mm)

(3) 段丘の形成

約80万年前から堆積を始めた砂礫も、山地の急激な隆起が衰えるとともに堆積を終了して扇状地が完成する。台地となった扇状地の面には風で運ばれてきた砂や火山灰などが堆積するようになる。

飯島町には御岳火山や九州方面の火山から飛来した火山灰や軽石（テフラ）が堆積している。噴出年代の明らかなテフラから段丘面の形成年代を推定することができる。

扇状地が出来上がった当時の面は、その後の河川の侵食により削られて、図9の①で示した面のみが残されている。この面には図10のような御岳第1テフラが堆積している。

これにより扇状地面が完成した年代はこのテフラが降る前の10万年以上前と考えられる。

この時代の面は久根平・春日平・高尾・赤坂・石曾根などに分布し、黄色～オレンジ色の軽石は「みそ土」と呼ばれている。

やがて①の扇状地面を河川が侵食して図9②の段丘面が形成された。飯島地区では石曾根の面を昔の与田切川が侵食し、やや低い島居原の面を形成した。田切地域では月嘗平にその時代の面が残されている。この面には御岳第1テフラが削り取られて失われているが、約6万年前に飛来した御岳三岳テフラ（O n - M t）が部分的に載っている。このことから②の段丘面の形成は約6万年前と推定される。

この地域には約6万年前と約2万年前に氷河期の寒冷期があり、南駒ヶ岳の北東面に摺鉢窪カールという水河によって削られた地形が残っている。

②の面は、約6万年前の寒冷気候によって海面が低下し、その結果河川の侵食力が増して造られた地形と考えられる。

次の時代に再び河川の侵食作用が強くなり、②の面を削って追引・南田切・



図9 田切方面の段丘面区分図 ★は南駒湯発露地点

赤坂などに図9③の面ができる。この面には薄い火山灰土に九州南部の始良カルデラから約3万年前に飛来した始良Tnテフラ(AT)の火山ガラスが混じっている(図11)。従って面の形成はこのテフラが降灰する約3万年前以前である。

再び河川の侵食作用が増大し、藤巻川流域には図9④の広い河原ができる。この広い河原をつくった当時の川は現在の藤巻川よりも水量の多い河川が流れていたものと考えられるが、河床をさかのぼっていくと上流が中田切川に切断されている。このような川は「首なし川」と呼ばれ各地に存在する。日方磐神社のある面も、藤巻川の面とほぼ同時代に中田切川によって侵食された面と考えられる。この面には始良Tnテフラが観察されないことや御嶽の火山灰も含んでいないことからおそらく2万年前以降に形成された面であろう。この時期は2万年前の水期と一致しており、水期の海面低下による侵食力の増大によって形成されたものと思われる。

その後約1万年前頃から再び河川の侵食作用が強くなり④の面が侵食されて図9⑤の現河床面を形成した。堤防のない頃は川は自由に蛇行して氾濫原をつくってきた。



図10 約10万年前に飛来した御嶽の韓石御岳第1テフラ (On-Pm1)
1978年春日平で撮影、厚さ約1m

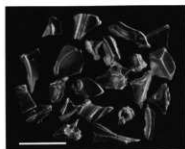


図11 追引の始良Tnテフラ(AT)
火山ガラス 白線は1mm

(4) 活断層の活動

図9の白い破線は田切断層(松島1995)の位置を示している。断層の活動によりこの線を境に東側の面が落ち、西側の面が上がっている。この断層は段丘面を南北に走り階段状の地形をつくっている。しかし①②③の面を切断しているが、④⑤の面は切断していない。従って断層の活動は③面形成以後で④面形成以前であろう。

(5) 段丘面と遺跡

昭和61年度の歴史文化財緊急発掘調査により飯島町針ヶ平に旧石器の遺物が発見された。石器群は始良Tnテフラの直下にあり、その当時始良Tnテフラの年代が約2万5千年前とされていたことから報告書では石器の年代を2万5千年～3万年前としている。しかし現在では始良Tnテフラの年代が約3万年前となり、石器の年代も3万年前以前と考えられる。従って針ヶ平石器人の遺物は図9①～③の面に発見の可能性のあるものの、図9④⑤の面には存在しないものと推定される。

今回の遺跡調査地の地形は約2万年前以後に形成されたものであり確認できる遺構は2万年前より新しい遺構である。また約1万年前に下刻の始まった河川は④の面の地形を大きく変える能力はなく、おそらく南側遺跡の遺構が造られた約5万年前の地形は現在(農業構造改営前)とほぼ同じと考えられる。

参考文献

- ・松島信幸 1995 「伊那谷の造地形史」【飯田市美術博物館調査報告書3】
- ・飯島町教育委員会 1987 「針ヶ平第1遺跡 昭和61年度歴史文化財緊急発掘調査報告書」
- ・竹下宏幸・松島信幸・寺平宏 2009 「長野県南部、伊那盆地における中期更新世テフラの層序と広域対比」(2009日本地質学会116年学術大会講演要旨)

3 歴史環境

(1) 田切地区の歴史事象

- ・縄文時代前期後半、太田ノ沢春日平遺跡に人の営みの形跡が残る。
- ・縄文時代中期、各所で人の営みが盛んになり、町谷・太田ノ沢春日平・春日平原・南割の各遺跡に集落ができる。
- ・縄文時代後期以降、人の営みが低調となる。
- ・弥生時代、町谷・太田ノ沢春日平・春日平原などに小規模の形跡が残る。
- ・東山道が田切地区内を通った。道筋はいくつか説があるが、最近南割遺跡の東方付近を通ったと見る向きが多い。
- ・日方磐神社の場所に古代から神社が営まれた可能性がある。
- ・鎌倉～戦国時代、飯島氏の支流田切氏が田切城（館）を営む。現在につながる開発が始まる。
- ・戦国時代、甲斐の武田氏によって追引地籍、関の地蔵尊付近に関所が設けられた。
(江戸時代以降省略)

(2) 田切地区の遺跡

田切地区には、中田切川の氾濫原を除き、中央アルプスの山裾から天竜川直上までの広い地域に20の遺跡が点在する(図12・表1)。そのうち田切城(中世)・日方磐神社(縄文・古代・中世)以外はどれも縄文時代中期を中心とする遺跡である。

これまでに中央自動車道の建設時、および県営圃場整備事業が実施される際に以下の遺跡で発掘調査がおこなわれた。

- ① No34 庚申平遺跡(長野県教育委員会「中央自動車道報告書飯島町内その3」昭和48年)
- ② No36 太田ノ沢春日平遺跡(長野県教育委員会「中央自動車道報告書飯島町内その3」昭和48年、飯島町教育委員会「太田ノ沢春日平」昭和51年)
- ③ No37 久根平遺跡(長野県教育委員会「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡飯島町久根平遺跡」昭和47年)
- ④ No39 町谷遺跡(飯島町教育委員会「町谷」昭和50年)
- ⑤ No46 平沢遺跡(飯島町教育委員会「田切平沢遺跡」昭和56年)

南割遺跡から2km以上西に離れた町谷遺跡では、台地上に縄文中期中葉の住居跡1軒、縄文中期後葉の住居跡7軒、弥生時代後期の住居跡2軒が確認された。この遺跡から沢を隔てた南隣は町内最大規模の高尾第一遺跡である。町谷の台地を北に降ると稜玉大珠が拾われている春日平原遺跡、さらに北には縄文前期後半・中期前半・晩期終末の遺物が出土している太田ノ沢春日平遺跡がある。

田切地区の中～東部では、南割遺跡を除くと、天竜川段丘上の平沢遺跡で縄文中期後半の直径6.5mを測るやや大型の住居跡が検出された。日方磐神社遺跡では神社に関係する古代・中世の成果が期待されて平成21年に試掘調査がおこなわれたが成果がなかった。それ以外の遺跡は土器片や石器が拾われていることから埋蔵文化財包蔵地に登録されているが、散布地と見られている。

表1 周辺の遺跡一覧

田切地区の全遺跡のほかは主要な遺跡

遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の種類							遺跡の時代							所在地					
		散布地	集落跡	官衙跡	城館跡	社寺跡	古墳	寺の跡	生産遺跡	その他	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良		平安	中世	近世	近・現代	不明
34	庚申平		○																		田切春日平
35	櫻之脇	○								○											田切春日平
36	大田ノ沢春日平		○								○	○									田切春日平
37	久根平		○																		田切春日平
38	久根平東	○									○										田切春日平
39	町谷		○								○	○									田切春日平
40	春日平中原		○								○	○									田切春日平
41	孔子廟	○									○										田切追引
42	竹原	○									○	○									田切追引
43	追引	○									○										田切追引
44	南割		○								○										田切南割
45	原畑	○									○										田切南割
46	平沢		○								○										田切南田切
47	原垣外	○									○				○	○					田切南田切
48	中平										○	○									田切中平
49	田切月替平	○									○				○	○					田切中平
50	北河原										○										田切北河原
51	田切山ノ神										○										田切北河原
115	日方整神社	○									○				○	○					田切南割
122	田切城				○											○					田切追引
3	山藩		○								○										飯島岩間
7	宮の平										○										飯島岩間
9	岩間城		○		○						○				○						飯島岩間
13	高尾第1		○								○										飯島高尾
14	高尾第2		○								○										飯島高尾
25	堂前		○								○				○						飯島石曾根
27	唐沢城跡				○																飯島鳥居原



図12 周辺の遺跡 (1/30,000)

第3章 調査の方法

1 調査の方法

南割遺跡に登録された範囲にかかるバイパス建設用地のうち、明らかに過去の圃場整備などで消滅している部分以外の2,500㎡を調査対象とした。

現況は水田で、北から南に低くなる3枚の圃場が対象となったため、北の水田からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と調査区を分けた。

Ⅰ区の北側から、水田の耕作土と水田保水のための地場をバックホウで慎重に除去しはじめたところ、地場の下部からはすぐに拳〜人頭大の礫が現れ、昔の川原の様相を呈した。約2万年前に流れていた中川切川の層と考えられ、本来上部にあったはずの土層は圃場整備で削平されて現存しないと判断された。

この状況が全城に及んでいるのか、まず全体像をつかむため、また、雨天時の排水を考慮して、Ⅰ区〜Ⅲ区の西端にバックホウで幅1mのトレンチを入れて確認することとした。その結果、Ⅰ区とⅡ区の名圃場の南側にはロームが載っている部分があった。Ⅲ区のトレンチからは北から南まで削平されたものと考えられた。

トレンチ観察後、Ⅰ〜Ⅲ区全面で水田耕作土をバックホウで除去し、Ⅰ区南側とⅡ区南側を中心にジョレン等を使用して人力で掘り下げた。遺構が確認されると移植ゴテ等で掘り下げた。

包含層以下の遺物は位置を記録して取り上げた。耕作土中から出土した土器片・石器は、圃場整備によって大きく移動したものと考えられるため、調査区ごとに一括して取り上げた。

遺構検出にともない平面図作成用に調査区内に基準ポイントを設置した。基準ポイントAはN35°41'52.3" E137°56'36.8"に設置し、ポイントA'(N35°41'53.4" E137°56'36.5")を結ぶラインを基準ラインとして、遺構の検出場所にあわせてポイントを設置し簡易やり方測量により作図した。

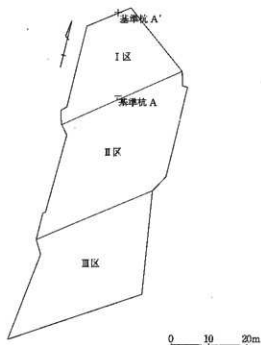


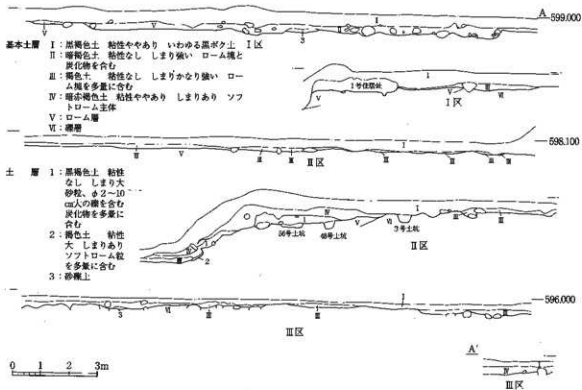
図13 調査区 (1/1,000)

2 基本的層序

本遺跡は中田切川により形成された段丘面に位置し、北側から南側へ緩やかに傾斜している。昭和54年におこなわれた圃場整備により大きく土が動かされている。基本的な層位は下記のとおりである(図14)。

- 第I層 黒褐色土層 耕作土
- 第II層 暗褐色土層 ローム塊と直径5~40cm大の礫を多量に含んでいる。圃場整備時に重機により転圧された土で非常に硬い
- 第III層 褐色土層 ローム塊と直径10~50cm大の礫を含んでいる。圃場整備時に重機により転圧された土で非常に硬い
- 第IV層 暗赤褐色土層 攪乱されたソフトローム。圃場整備時に動かされた土である。
- 第V層 ローム層
- 第VI層 礫層

圃場整備は傾斜地を削り込み、谷側には土を盛って平らな面を形成し水田が構築されていた。削平された場所ではローム層が失われ転圧された土の下が礫層となっている。良好なローム層は各調査地区の縁辺に礫層と混在しながら残っている。II区南東部では赤褐色のソフトロームとなっていた。I区では第V層上面と第VI層上面が遺構確認面となっている。II区では第II層下面および第III層が遺構確認面となっている。



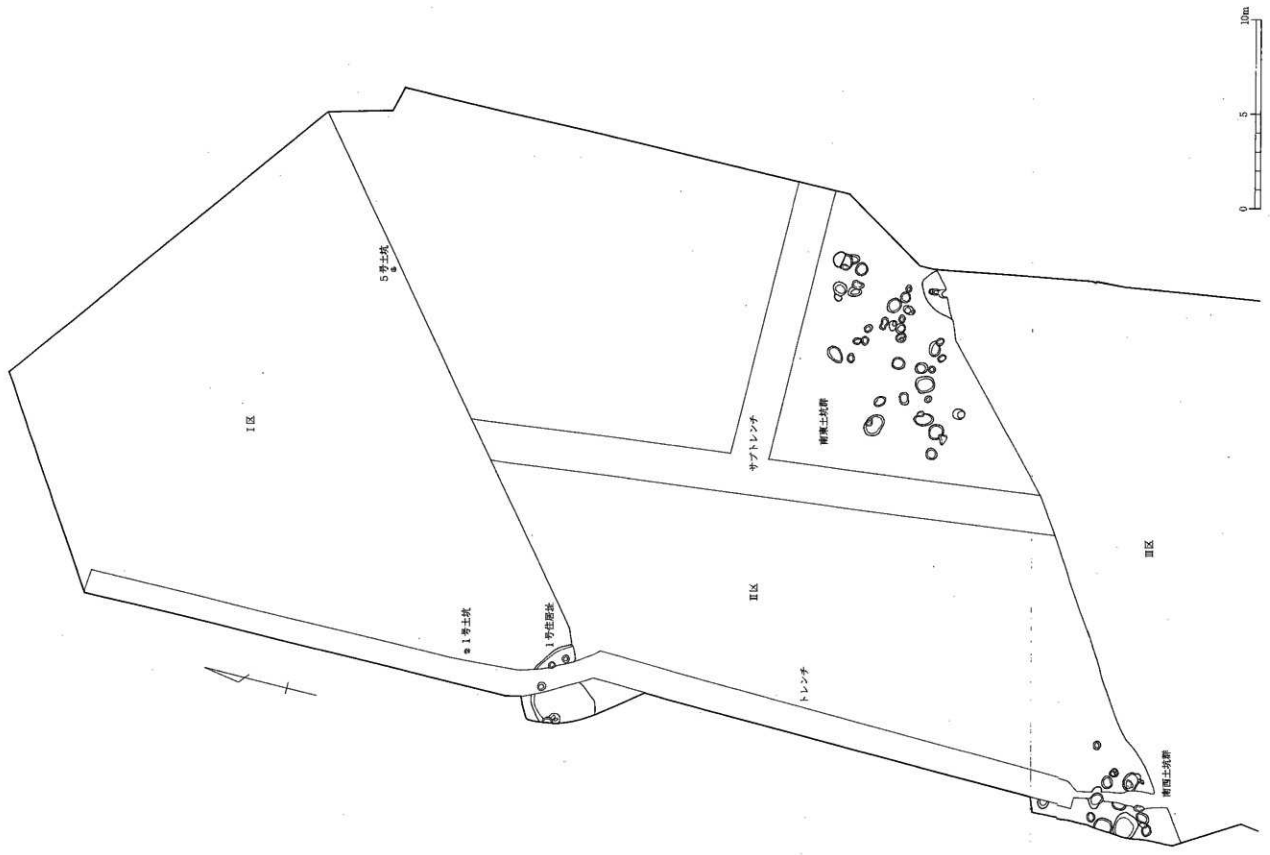


図15 遺構配置図 (1/200)

第4章 検出された遺構と遺物

1 概 要

本遺跡では縄文時代中期の竪穴式住居址1軒、土坑50基を検出した。特記すべき事項として2基の土坑内から土偶が出土している。

2 竪穴式住居址

(1) 1号住居址 (図16~21・43~45、図版2~5・18~20・25~27)

I区西側に設定したトレンチによって検出された。西側が調査区域外にかかり、南側は圃場整備時に削られているが、遺存状態は比較的良好であった。

平面形態は住居址西側が調査区域外にかかるため一部不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。規模は残存長(3.9)m×(3.0)m、壁高は20~26cmを測る。

床面はほぼ平坦で堅緻である。炉址周辺とP4、P5周辺に貼り床が見られた。

覆土は6層に分けられる。覆土中からは大量の礫と土器片が出土しており、いわゆる「吹上パターン」による廃棄状況を呈していた。

北側の壁際に沿って周溝が検出された。幅は8~12cmで深さは6~8cm、断面形はU字形となっている。周溝内に直径14~16cmの小ピットが検出された。

ピットは壁に沿って6箇所検出された。P1~P5が柱穴で、それぞれの規模は次のとおりである。P1:(長軸)40cm×(短軸)38cm×(深さ)43cm P2:40cm×32cm×46cm P3:44cm×44cm×32cm P4:55cm×(26)cm×32cm P5:62cm×(52)cm×54cm。P6はP3の南西に位置し斜め方向に掘り込まれていた。規模は28cm×26cm×7cmを測る。P4は周溝を切って造られていた。またP4とP5の間にも切りあい関係が見られた。P5の断面を観察すると柱を抜き取った後、ローム由来の暗黄褐色土で埋め戻し上部南側にはロームで貼り床を施していた。その後P4を掘り込んでいる。P3の覆土内より土器片が出土している(図21~20)。

炉は住居址のほぼ中央より3基重複して検出された。1号炉の南側には炉石と思われる石が残っていた。上面には長径60cm×短径50cmの範囲に焼土が薄く堆積していた。炉体の掘り込みはやや不整の円形で長径40cm×短径34cmを測る。遺物は検出されなかった。2号炉は東側をトレンチに、南側を圃場整備時の削平にかかり一部しか遺されていない。上面には残存長50cm×27cmの範囲に焼土が広がっていた。西側には炉石が抜かれた跡が残り、その内側に浅い掘り込みを検出している。残存長50cm×25cmを測り、炉の中には6cmの厚さの焼土が残されていた。遺物は検出されなかった。3号炉は石製の炉で、長軸62cm×短軸60cmを測る。炉床には直径5~10cmの扁平な石が敷き詰められていた。炉石の内側は火を受けた形跡が残るが、炉内には焼土が残っていなかった。ほぼ完形の土器が2個体、炉の中から横倒しになって出土している。また炉の構築土内から土器片が出土している(図21~22)。切りあい関係からもっとも新しく構築された炉と思われる。

柱穴に重複関係が見られること、3基の炉が確認されたことから複数回の建て替えがあったと考えられる。

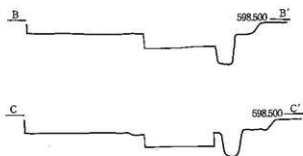
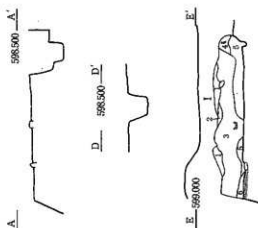
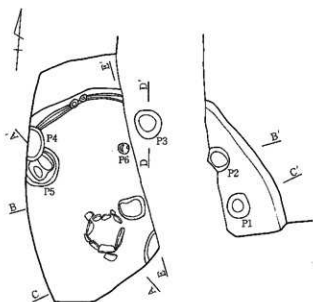
遺物出土状況 床面直上と覆土下層から完形の土器数個体を含む多量の土器片が出土している。特に住居址の南側には多数の完形に近い土器が礫に交じって複雑に折り重なっていた。接合関係も複雑で同一個体の土器片が床面直上や上層から出土したり、離れた場所の土器片が接合したりするなど、水平方向および垂直方向に散在していた。

ほぼ完形の1は床面より若干浮いた状態で検出された。横倒しになった土器の周辺に多数の礫が散在し、1.5m離れた場所から出土した底部と接合している。また口縁部の装飾部が離れた場所から出土している。4は底部を上に向けた状態で検出され、60cm離れた口縁部破片と接合している。5は大型の深鉢形土器の口縁部であるが、住居址内に破片が散在していた。2はほぼ完形であるが、3号炉の上部に横倒しになっていた半身を中心に破片が近接して出土している。出土している遺物は縄文時代中期中葉のものがほとんどであるが若干の時期差が見られる。

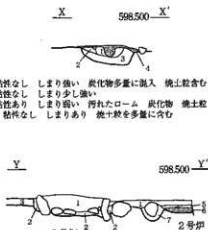
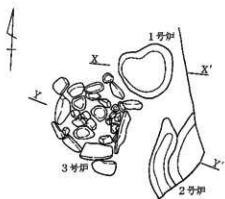
遺物 1は井戸尻式の深鉢形土器で口縁部に大きな装飾がついている。口縁部は無文で、胴部との境に刻みを持つ内帯がある。胴部には刻みを持つ隆帯による区画文帯をめぐらし中を幅広い沈線で充填している。2も井戸尻式の深鉢形土器で口縁部の装飾を欠損している。口縁部は無文で胴部には立体的なモチーフがめぐっている。5、18、19、20は扉内式の特徴を有している。3は波状口縁を持ち頸部がわずかにくびれる小型の深鉢形土器である。口唇部より垂下する隆帯と、胴部中ほどにめぐる隆帯には指頭圧痕が見られ、上半に半截竹管による沈線が施されている。器壁は薄く焼成も良好である。いわゆる「平出三類A土器」に類似している。4、6～9、14～17は下伊那型櫛形文土器である。このうち4は胴部下半に半円弧状に隆帯が貼付されており櫛形文土器の特徴を持つが、口縁部が大きく開く器形、尖り気味の波状突起および口縁部の文様帯の構成要素など東海系の影響も見られる。7と15は口縁部の文様帯の下部に指頭圧痕が施された隆帯を持つなど平出三類A土器の様相が見られる。6が胴部下半に隆帯と沈線の組み合わせによる櫛形文を持つに対して、7～9の土器では隆帯で区画された中を角押し文や爪形文で充填し、また14～17を含めて口縁部の文様帯にも角押し文や爪形文を多用している。下伊那型櫛形文土器の器壁は薄く焼成も良好であるが、14・17は器壁が厚く焼成が甘いという在地的特徴を有している。10、11、12、13は口縁部の文様帯が狭く小さな波状突起を持つことから東海系の土器と思われる。10、11は口縁部を肥厚させ隆帯に沿って半截竹管による押し引き文を施している。文様帯より下方をへら状工具で削り、器壁を薄くするとともに角を形成し、上から見ると胴部が多角形になるように作られている。これらの特徴から山田平式末から北屋敷式初頭に位置すると考えられる。土器の色調は汚紫褐色を呈し、胎土を含め在地的のものと大きく異なっていることから搬入された可能性が高い。12、13は北屋敷式の可能性が高いが、胎土が東海系のものとは異なっている。22は3号炉内から出土した土器で、指頭圧痕を持つ隆帯や上部には縄文が施されているなど、平出三類A土器の特徴が見られる。23は覆土上層から出土した有孔台付土器で、端部に沈線の文様が施されている。縄文時代中期後半のものと思われる。

このほかに黒曜石石鏃1点、石匙1点、打製石斧8点、横刃形石器2点、磨石2点、石皿1点、黒曜石剥片が2点出土している。黒曜石の剥片の出土量が少ないのに対して、打製石斧の出土量が多かった。図43-1の黒曜石の石鏃は重さが0.5gと非常に小さいものである。図43-7・8の打製石斧は住居址床面から近接して出土し、8はほぼ中央部で2つに折れた状態であった。

時期 縄文時代中期中葉から中葉末



- I 基本土層 耕作土
- 1: 褐色土 粘性なし しまりあり 炭化物を含む
 - 2: 黒褐色土 粘性大 しまりあり
 - 3: 黒褐色土 粘性なし しまりあり φ5cm-φ20cm大の礫を多量に含む 炭化灰多く含む
 - 4: 褐色土 粘性少なく しまりあり 炭化物を若干含む
 - 5: 黒褐色土 粘性なし しまりあり 炭化物を多量に含む
 - 6: 暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 炭化物と焼土粒を多量に含む



- 1号炉
- 1: 暗褐色土 粘性なし しまり強い 炭化物多量に混入 焼土粒を含む
 - 2: 暗褐色土 粘性なし しまり少し強い
 - 3: 褐色土 粘性あり しまり弱い 汚れたローム 炭化物 焼土粒を多量に含む
 - 4: 赤褐色土 粘性なし しまりあり 焼土粒を多量に含む

- 3号炉
- 1: 黒褐色土 粘性なし しまりあり 炭化灰を含む
 - 2: 暗褐色土 粘性なし しまりなし ローム部混入 炭化物を多量に含む
 - 3: 褐色土 粘性あり しまり大 ローム由来 灰り尿
- 2号炉
- 5: 暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 焼土粒を多量に含む
 - 6: 赤褐色土 粘性なし しまりあり 焼土粒を多量に含む
 - 7: 暗褐色土 粘性なし しまり少し弱い 焼土粒、焼土塊を多量に含む



図16 1号住居址・炉址 (1/60・1/30)

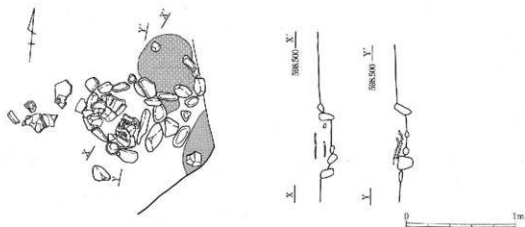
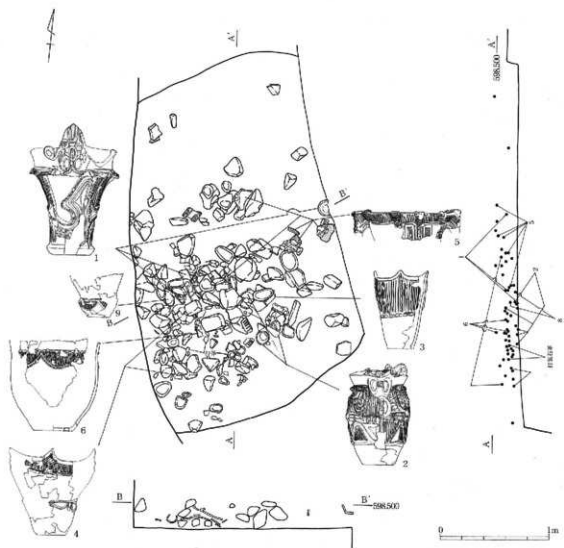


图17 1号住居址遺物出土狀況 (1/30)

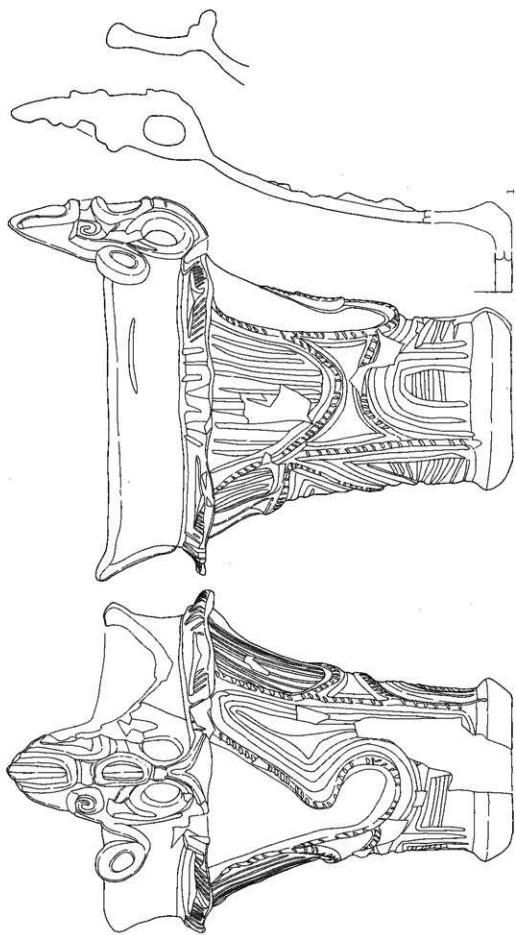


图18 1号住居址出土遗物(1) (1/3)

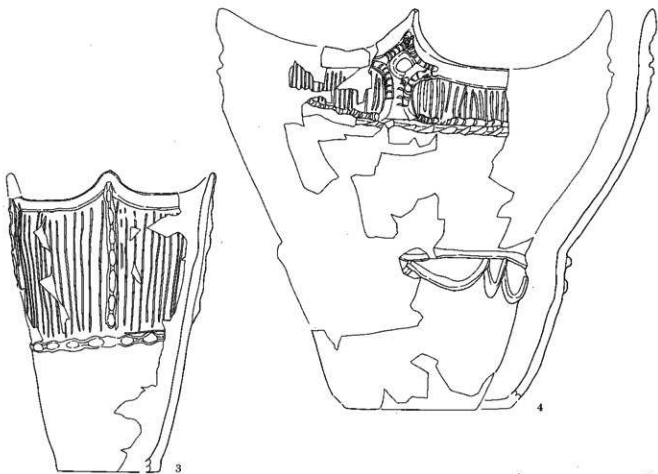


图19 1号住唐址出土遗物(2) (1/3)

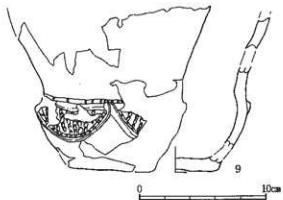
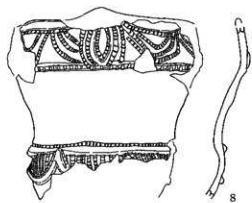
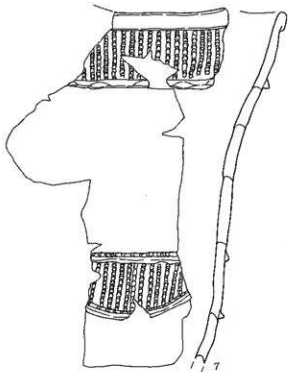
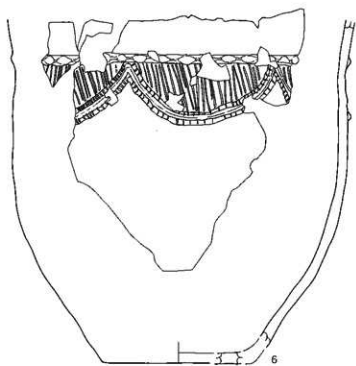
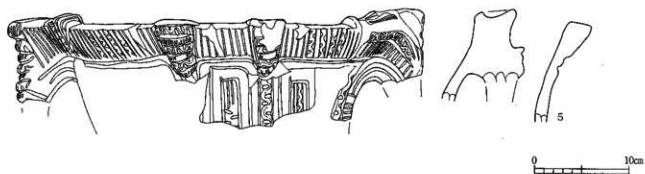


图20 1号住居址出土遗物(3) (1/4·1/3)

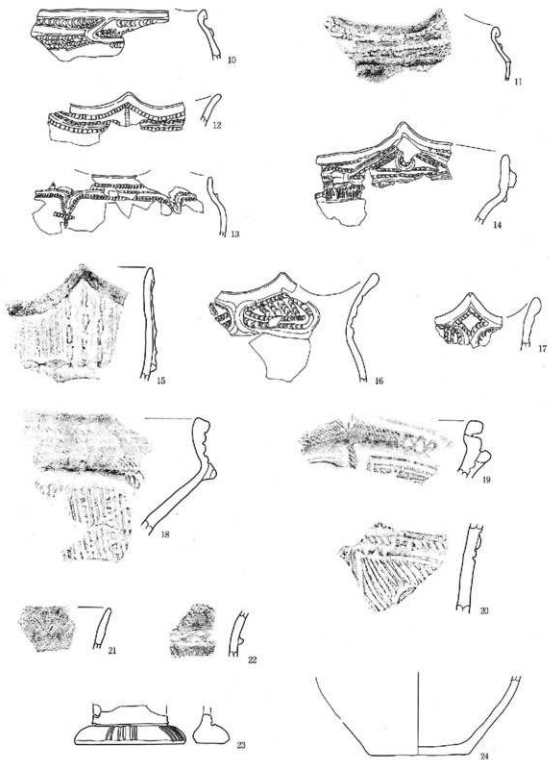


图21 1号住居址出土遗物(4) (1/3)

3 土 坑

(1) I区土坑

1号土坑 (図22・23、図版6・24)

I区の南西側、1号住居址の北側3.6mに位置する。礫層に掘り込まれており上部は削平されていた。

平面形はほぼ正円形を呈し、規模は残存長 (33) cm × (15) cm、深さ9cmで、壁は緩やかに立ち上がる。断面形は船底状で覆土は1層。炭化物を若干含むが焼土は認められなかった。

土坑の底から5cm上より土偶の体部を検出した。土偶は体部上方を西側に向けたうつぶせ状態で出土した。頭部、腕部と脚部が欠損し、出土時には胴体が2つに割れていた。いわゆる「尻張る土偶」と呼ばれる形状である。胴体の右半分と右足の欠損部に黒褐色の物質が付着しており、自然科学分析用資料として同定を依頼した(付録参照)。

時 期 縄文時代中期中葉末から後葉

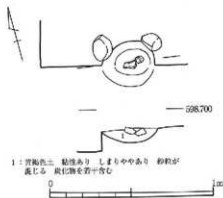


図22 1号土坑 (1/20)

自然科学分析用資料として同定を依頼した(付録参照)。

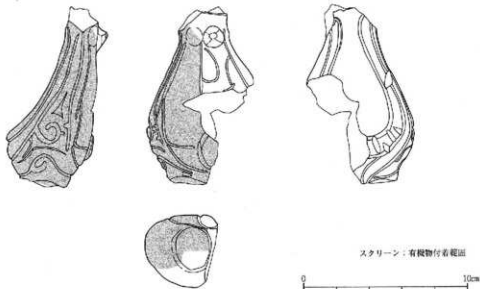


図23 1号土坑出土土偶 (1/2)

5号土坑 (図24、図版6・21)

I区の南東隅に位置する。上面や周辺が削平され遺存状態はあまりよくない。土器片が集中して出土したことから精査したところ、浅い掘り込みが認められ土坑と判断した。

平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は残存部で (24) cm × (7) cm、深さ8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は1層。

遺物 土器片が14点出土している。このうち同一個体と思われる縄文時代中期の深鉢形土器の破片が12点まとまって出土しているが、接合関係がほとんどなかった。1は深鉢形土器の胴部で平出三類A土器特有の半裁竹管による平行沈線文が施されている。2は深鉢形土器の頸部で指頭疣状を持つ隆帯を貼り付け、隆帯で区画された中を半裁竹管による平行沈線文で埋めている。このほかに黒曜石の剥片が1点出土している。

時期 縄文時代中期中葉



図24 5号土坑・出土遺物 (1/20・1/3)

(2) 南東土坑群 (図25～36 図版7～13)

Ⅱ区で確認した土坑のうち調査区南東側に位置するものを南東土坑群とした。南東土坑群周辺の遺構確認面は暗赤褐色を呈するソフトロームであった。ソフトローム層の下には大型の礫を含む礫層があり、部分的に露出していた。当初、遺構の確認作業を上層の暗褐色土層でおこなったが、土坑の覆土と差異があまりなかったことから遺構の確認が難しかった。確認した土坑の多くは平面が円形で浅く掘り込まれ遺物が伴わないものであったが、集石や遺物を伴うものも見られた。このような特徴を有する土坑について記述をおこなう。記述のない土坑については表2に規模などを記している。

7号土坑 (図26 図版9・21)

平面形は楕円形。規模は上端で長径116cm×短径90cm、深さ42cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。底部に50cm大の地山の礫が露出している。覆土は3層。汚れたロームを挟み下層の土には炭化物が多量に含まれていた。土坑の上層からやや厚みがある平らな石が出土している。

遺物 覆土の上層から正位の状態では1が出土している。1と3は壺内式の円筒状深鉢形土器で縦位構成の区画文が施されている。2は口縁部に爪形文が施され体部に縄文が施されている土器で、西日本の特徴を有している。

時期 縄文時代中期中葉

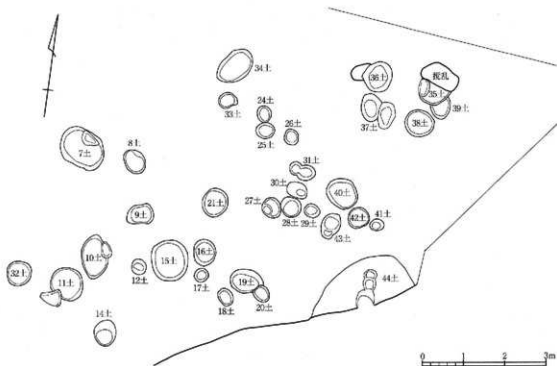
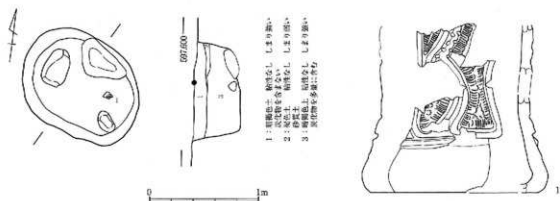


図25 南東土坑群 (1/80)



1: 掘削土 粘質なし しまり強
 2: 灰土 粘質なし しまり強
 3: 掘削土 粘質なし しまり強
 灰化層を多量に含む



図26 7号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

10号土坑 (図27 図版9)

平面形は楕円形。規模は上端で長径108cm×短径63cm、深さ30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層で炭化物が多量に含まれていた。覆土上層には多量の礫がほぼ同レベルで並び、土坑の底部には扁平な礫が散らかれていた。上層の礫の中には火を受けた痕跡のある礫がいくつか混在していた。遺物は検出されなかった。



図27 10号土坑 (1/30)

11号土坑 (図28・43~45 図版10・21・26・27)

平面形は円形。規模は上端で長径84cm×短径78cm、深さ38cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。土坑の南西縁部に52cm×44cmの大型の礫が接している。覆土は1層で炭化物を多量に含んでいる。覆土上層から扁平な石が出土し、土坑の底には地山の礫が露出していた。

遺物 覆土内から土器片と打製石斧1点、二次加工のある剥片1点、石錘1点が出土している。1は下伊那型楕円形土器の胴部破片で、隆帯で区画された中に集合沈線を描いている。

時期 縄文時代中期中葉

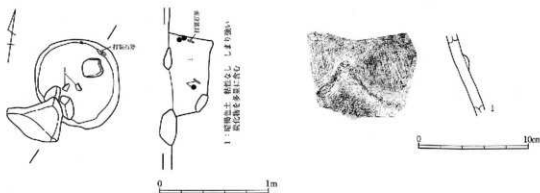


図28 11号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

12号土坑 (図35 図版21)

平面形は円形。規模は上端で長径39cm×短径35cm、深さ11cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層。

遺物 1は壱内式の円筒状深鉢形土器片で縦位構成の区画文が地えられている。

時期 縄文時代中期中葉

15号土坑 (図29・45 図版10・21・27)

平面形は円形。規模は上端で長径100cm×短径94cm、深さ32cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は3層で上層の覆土は炭化物を多量に含んでいる。土坑上層の縁辺を囲うように扁平な石が並び、火を受けた痕跡のある石も含まれていた。

遺物 1は三角押引き文を持つ土器片で、器壁が薄く色調も暗紫褐色を呈すという東海系の土器の特徴を有している。このほかに上層覆土より横刃形石器1点が出土している。

時期 縄文時代中期中葉

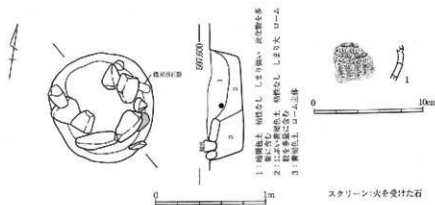


図29 15号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

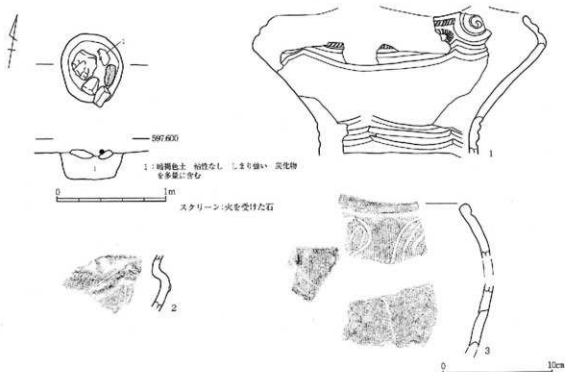


図30 16号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

16号土坑 (図30 図版10・11・21・22)

平面形は円形。規模は上端で長径64cm×短径55cm、深さ25cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は1層で炭化物を多量に含んでいる。覆土上層に集石が見られ火を受けた痕跡のある石も含まれていた。

遺物 礫と同レベルから、口縁部を上にした正位の状態です鉢形土器が出土し、その周辺からも多数の土器片が出土している。1は咲畑式の深鉢形土器で、波状口縁を持ち口辺部に爪形文と棒状工具による渦巻き状沈線が施されている。2は下伊那型楕形文土器の胴部破片である。3は波状口縁を持つ土器で、胴部に棒状工具による集合沈線を施したのち、ヘラ状工具により不整形の模様を描いている。

時期 縄文時代中期後葉

24号土坑 (図35 図版22)

平面形は楕円形。25号土坑に接する。規模は上端で長径41cm×短径33cm、深さ13cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層。覆土上層より土器片が出土している。

遺物 2は下伊那型楕形文土器の胴部破片で、刻みを持つ隆帯で区画された中に半截竹管で平行沈線を施している。

時期 縄文時代中期中葉

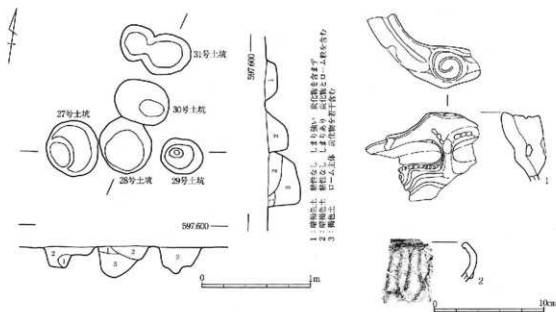


図31 27～31号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

27号土坑 (図31 図版11・12・22)

平面形は円形。28号土坑から31号土坑に近接している。規模は上端で長径51cm×短径48cm、深さ20cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。東側にテラスを持つ。覆土は2層。

遺物 1は深鉢形土器の口縁部で胴部上面に沈線による渦巻き文が施されている。

時期 縄文時代中期後葉

31号土坑 (図31 図版22)

平面形は円形に張り出し部を持つようたん型。規模は上端で長径65cm×短径32cm、深さ12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層。

遺物 2は細隆線文土器の口縁部で、粘土紐を貼り付けている。

時期 縄文時代中期中葉末から後葉

34号土坑 (図35 図版22)

平面形は楕円形。規模は上端で長径100cm×短径66cm、深さ13cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層。

遺物 土坑内からは少量の土器片が出土したが、図示できたのは3のみである。細隆線文土器の口縁部で、U字形の粘土紐を貼り付けている。

時期 縄文時代中期中葉末から後葉

40号土坑 (図32 図版12・22)

平面形は不整円形。42号土坑に近接する。規模は上端で長径80cm×短径71cm、深さ12cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は1層で炭化物とローム粒を含む。覆土上層から32-1の土器片がまとめて出土している。また土器と同一レベルで南側から20cm大のやや平らな石と小礫が出土している。

遺物 1は下伊那型柳形文土器の胴部破片で、隆帯により区画された中に半截竹管で平行沈線を施している。2は細隆線文土器の口縁部である。

時期 縄文時代中期中葉末

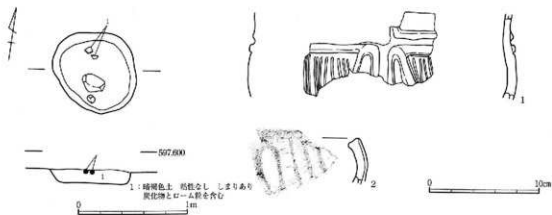


図32 40号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

42号土坑 (図33 図版23)

平面形は不整円形。40号土坑、41号土坑、43号土坑に接している。規模は上端で長径54cm×短径49cm、深さ16cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。南側にテラスを持つ。覆土は1層。覆土上層に集石を持つ。

遺物 1は深鉢形土器で、棒状工具により下伊那型の入組み文が施されている。

時期 縄文時代中期後葉

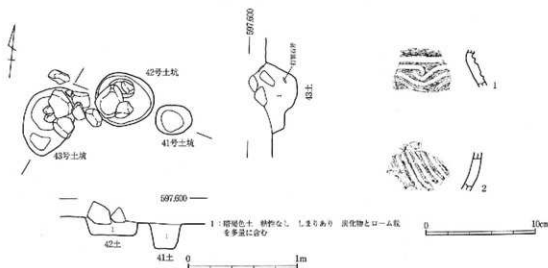


図33 41～43号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

43号土坑 (図33・44・45 図版13・23・26・27)

平面形は不整楕円形。42号土坑に接し、間には礎が点在する。規模は上端で長径66cm×短径45cm、深さ30cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり鍋底状の断面形を示す。南側にテラスを持つ。覆土は1層。覆土上層には多数の礎が密集し、その間より無文の深鉢形土器の破片が出土している。覆土中層より打製石斧1点が出土している。

遺物 無文の深鉢形土器の破片のほか中期中葉末の小片が出土しているが、図示できたのは2のみである。このほかに打製石斧1点、磨石1点が出土している。

時期 縄文時代中期中葉末

44号土坑 (図34・45 図版13・23・27)

南東土坑群の南東に位置し、東側は掘場整備時に削平されて失われている。平面形は隅丸方形と推定される。規模は上端で残存長径(270)cm×残存短径(120)cm、深さ108cmを測る。壁は急角度で立ち上がり逆三角形の断面形を示す。覆土は4層。44号土坑の覆土を切り込んで45号土坑が造られていたが、両者の覆土は非常に似通っていたため平面で確認することができず、45号土坑は断面のみの確認となっている。44号土坑の底部には3個のテラスが見られた。覆土内から多数の縄文時代中期土器片と横刃形石器1点が出土している。

遺物 1は下伊那型櫛形文の影響が見られる深鉢形土器の口縁部である。器壁が厚く、焼成も甘い。口辺部に沿って角押文が施されている。2は東海系の土器の口縁部で、爪形文と角押文が施されている。3は下伊那型櫛形文土器の胴部で刻みを持つ壺帯で区画された中を半截竹管で平行沈線が施している。このほかに横刃形石器1点、黒曜石の剥片が1点出土している。

時期 縄文時代中期中葉



図34 44号土坑・出土遺物 (1/40・1/3)

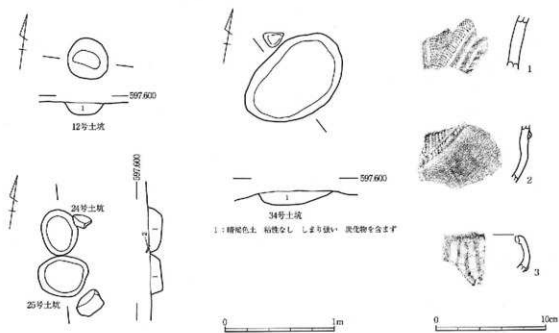


図35 南東土坑群・出土遺物 (1/30・1/3)

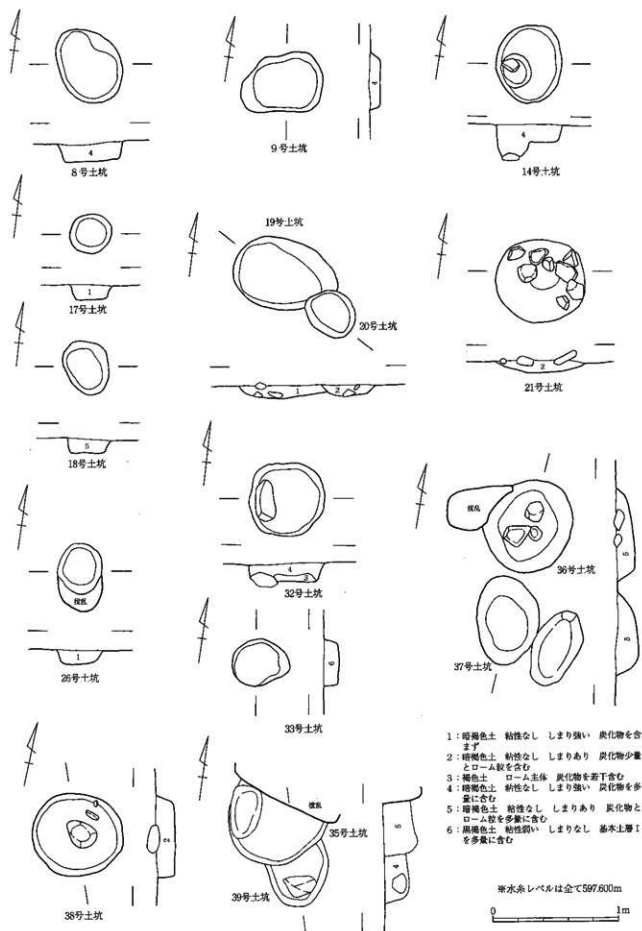


図36 南東土坑群 (1/30)

(3) 南西土坑群 (図37~40 図版14~16)

Ⅱ区の南西側に位置する土坑群である。当初、上層の堆積土内より多数の礫と縄文土器片を確認したことから住居址として調査をおこなったが、住居址としての確証が得られず、土坑群として取り扱った。

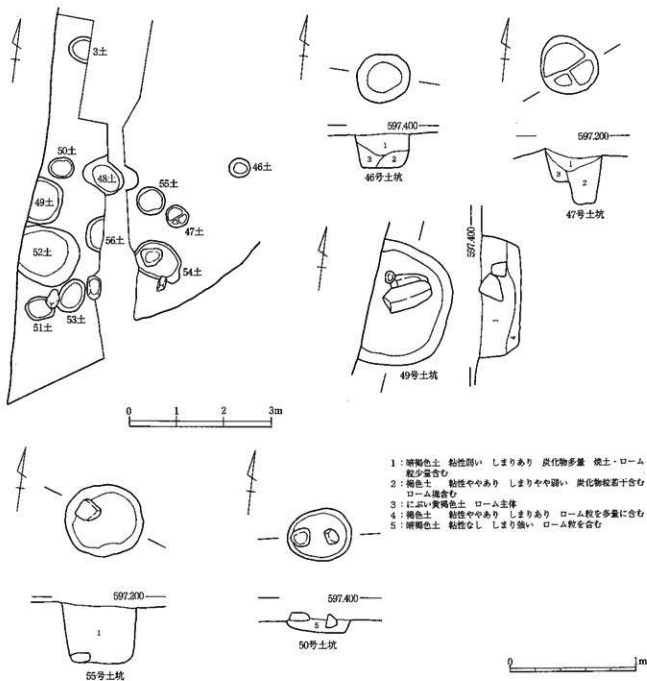


図37 南西土坑群 (1/80・1/30)

3号土坑 (図38 図版23)

南西土坑群の最も北側に位置し、東側をトレンチによって切られている。平面形は楕円形と推定される。規模は残存長径(44)cm×短径54cm、深さ28cmを測る。壁は总角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は1層。炭化物とローム粒を多量に含んでいる。

遺物 1は細隆線文土器の口縁部で、陸帯を半円弧状に貼付している。

時期 縄文時代中期中葉末

48号土坑 (図38 図版23)

平面形は不整の楕円形で、東側上部をトレンチで切られている。規模は残存長径(89)cm×残存半径(71)cm、深さ38cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は3層で第4層に炭化物が多量に含まれていた。

遺物 土坑の覆土内より中期中葉の土器片が出土しているが、図示できたのは2のみである。

時期 縄文時代中期中葉

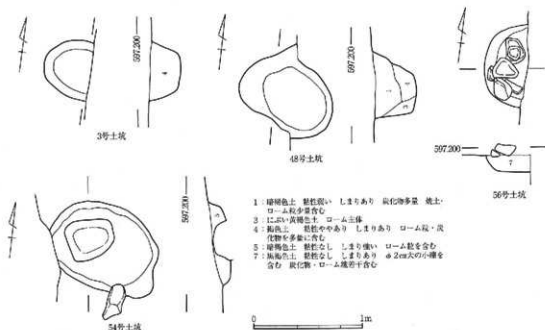


図38 南西土坑群・出土遺物 (1/30・1/3)

52号土坑 (図39・40・44 図版15・16・23・24・26)

南西土坑群のほぼ中央に位置し、西側が調査区域外にかかっている。平面形はやや不整の円形。規模は上端で残存長径(125)cm×短径120cm×深さ37cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状を示す。覆土は1層で、炭化物が若干含まれていた。土坑内から直径20cm大の礫が密集して検出され、多数の土器片も出土している。土坑の中央部上層からはほぼ完形の土器が横倒しになった状態で出土している。また土坑の南東側上層から土器の体部が出土している。

遺物 2は深鉢形土器で胴部下半を欠損している。「下伊那タイプ」の土器で、波状突起を4個持つ口縁部には陸線によって区画される文様帯を持ち、半截竹管による押し引き文が施されている。胴部文様帯は縄文を地文として沈線による入組み文や懸垂文が施されている。3、5、7は細隆線土器の破片で

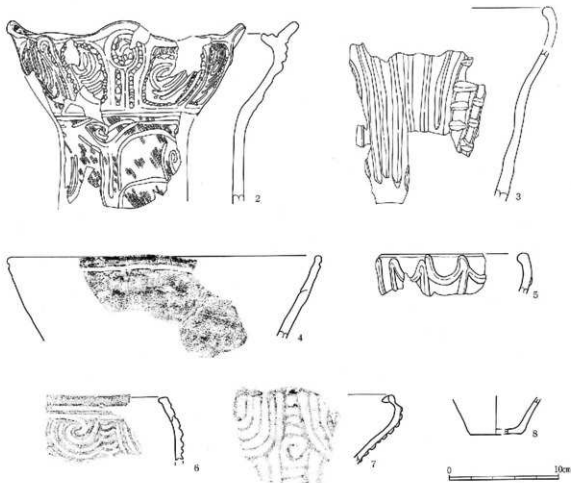
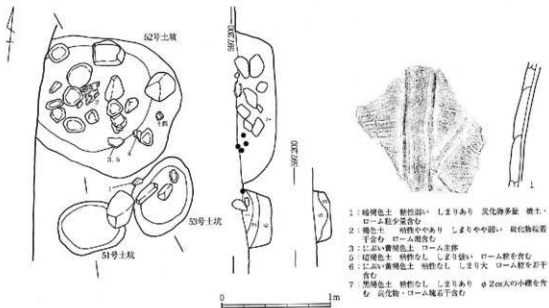


図39 51~53号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

3と5は同一個体と思われる。3は深鉢形土器の口辺部で縦方向に粘土紐を貼り付け、部分的に梯子状に横方向の粘土紐を貼り付けている。7は口縁部で隆帯を半円弧状に貼付し、文様帯を横方向の隆帯によって連結している。4は浅鉢形土器で口唇部に一条の沈線が施されている。後期から晩期に見られる粗製土器と思われる。土偶は臀部のみで、南西方向を向きうつぶせ状態で検出された。いわゆる「尻張り土偶」と呼ばれる形状である。脚部の剥離痕には直径4mm大の脚部を接合する際の芯棒の痕跡が見られる。また胴部にも同様の芯棒の痕跡が2箇所見られた。このほかに打製石斧2点が出土している。

時期 縄文時代中期後葉

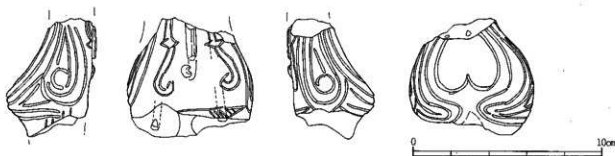


図40 52号土坑出土土偶 (1/2)

53号土坑 (図39・44 図版24・26)

52号土坑の南東側に接して位置し、西側に位置する51号土坑との間には30cm大の礫がある。平面形は楕円形。規模は上端で長径75cm×短径53cm×深さ27cmを測る。壁は急角度で立ち上がり鍋底状の断面形を示す。覆土は3層。土坑上層の北西側縁近くに礫が点在している。土坑の北西側縁より土器片が出土している。

遺物 1は細隆線文土器で縦方向の隆帯によって区画された中を横方向の沈線で充填している。このほかに打製石斧1点が出土している。

時期 縄文時代中期後葉

54号土坑 (図38 図版24)

平面形は不整形で西側の一部をトレンチによって切られ、上面を削平されている。規模は上端で残存長径(90)cm×短径83cm、深さ8cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層。土坑の中央部には50cm大の礫が露出している。

遺物 4は下伊那型壺形土器の胴部破片で隆帯によって区画された中に半裁竹管で平行沈線を施している。

時期 縄文時代中期中葉

56号土坑 (図38 図版23)

東側半分をトレンチによって切られている。平面形は不明。規模は残存長径(76)cm×残存短径(40)cm、深さ16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり船底状の断面形を示す。覆土は1層。上層には扁平な石が密集していた。

遺物 3は鋭角で長めの刺突文を持つ土器である。

時期 縄文時代中期後葉か

4 遺構外出土遺物

調査区内からは多量の遺物が出土した。特に南西土坑群周辺からの遺物の出土量が多かった。また出土した石器のうち打製石斧の占める割合が非常に高かった。

(1) I区出土遺物(図41-1~7・43~45 図版25~27)

1は深鉢形土器の把手で縄文時代中期中葉。2は縄文時代前期の押し型文土器である。7は縄文時代後期の把手である。このほかに黒曜石石鏃2点、二次加工のある剥片1点、黒曜石剥片15点、打製石斧14点、磨製石斧1点、横刃形石器2点、磨石1点、石皿1点が出土している。図44-19は緑色岩製の磨製石斧の未製品で上端部を破損している。全面に制作中の敲打痕や剥離痕が残っている。図45-29は全面に掻痕が残る緑色岩製の磨石である。

(2) II区出土遺物(図41-8~24・43~45 図版25~27)

8は頸部に波状の隆帯文を持つ土器で縄文時代中期後葉。10は隆帯による籠目文を持つ土器で、縄文時代中期後葉。11は下伊那型楕円形土器で縄文時代中期中葉と思われる。13は器壁が薄く胎土も非常に緻密な土器で、縄文時代後期のものと思われる。14~24は南西土坑群周辺から出土した遺物である。14、15は東海系の土器で14は北屋敷式土器に類似する。18はキャリバー型の土器で全面に刺突文が施されている。下伊那系の土器と思われる縄文時代中期中葉末。23は深鉢形土器の底部で縄文が施されている。縄文時代中期中葉と思われる。

南東土坑群周辺から黒曜石剥片2点、二次加工のある剥片1点、打製石斧10点、小型磨製石斧1点、石鏃2点が出土している。また南西土坑群周辺からは黒曜石剥片8点、打製石斧4点、小型磨製石斧1点、横刃形石器2点、石鏃1点、磨石1点が出土している。このほかにII区全体から黒曜石剥片18点、二次加工のある剥片3点、打製石斧16点、磨製石斧3点、横刃形石器5点が出土している。

図44-20は南西土坑群周辺から出土した緑色岩製の小型磨製石斧である。先端部を欠損しているが非常に丁寧に研磨されている。図44-21の小型磨製石斧は南東土坑群周辺から出土したもので、湾曲した形状となっている。

(3) III区出土遺物(図42・44 図版26)

2は細隆線文土器の口縁部で縄文時代中期中葉末から後葉。このほかに黒曜石剥片4点、打製石斧10点、横刃形石器1点が出土している。III区は掘場整備による削平が著しく得られた資料は細片が多かった。

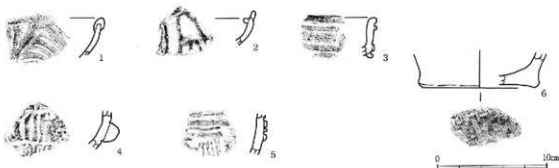


図42 遺構外出土遺物(2) (1/3)

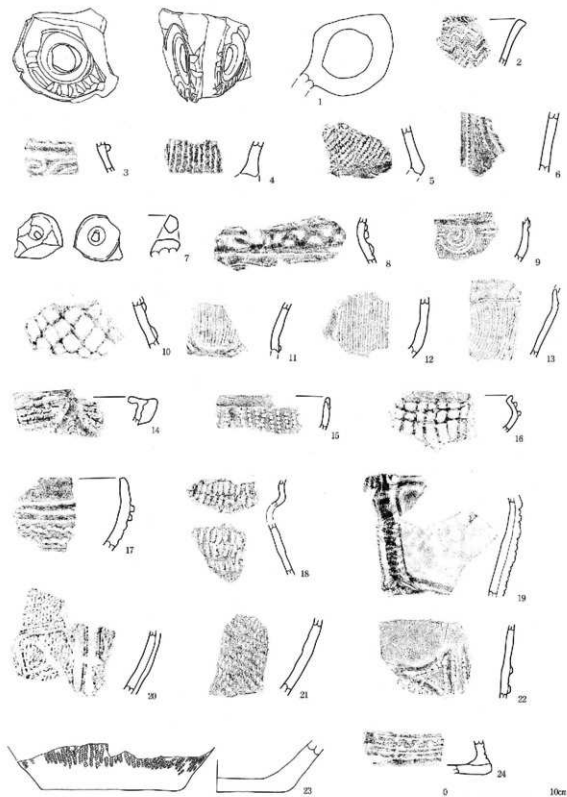


圖41 遼構外出土遺物(1) (1/3)

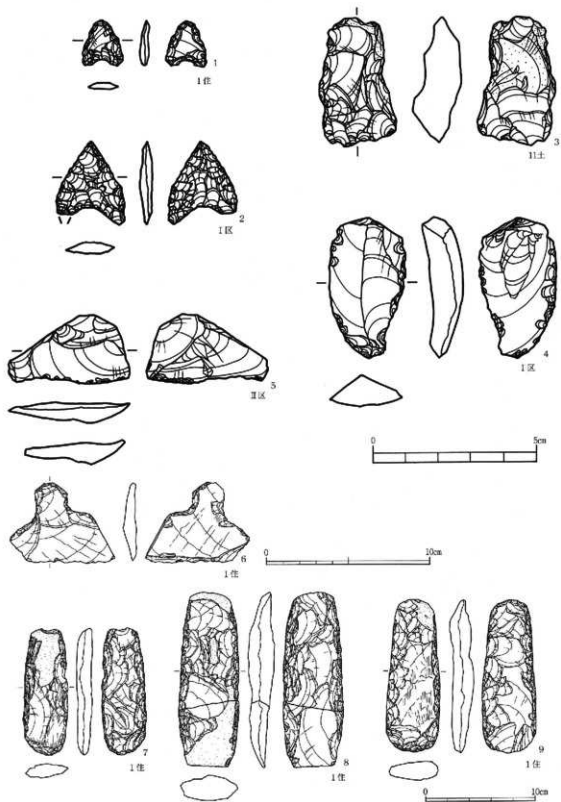


図43 石器(1) (1~5は1/1, 6は1/2, 7~9は1/3)

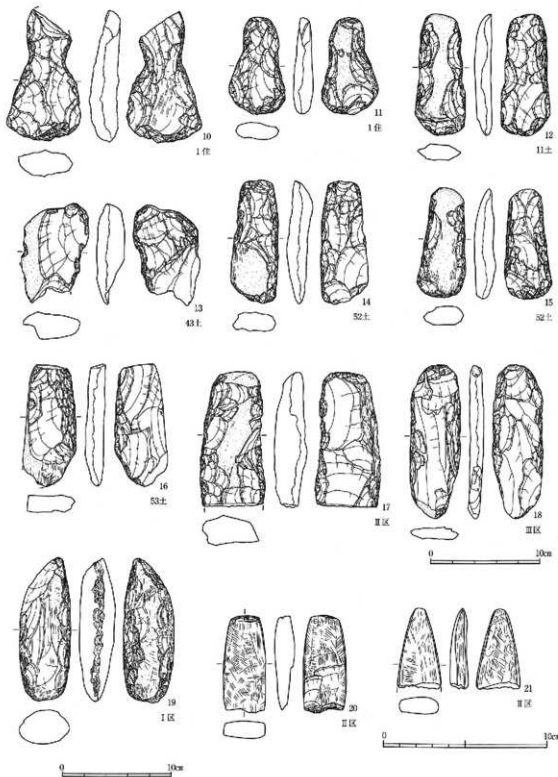


图44 石器(2) (20·21±1/2、10~19±1/3)

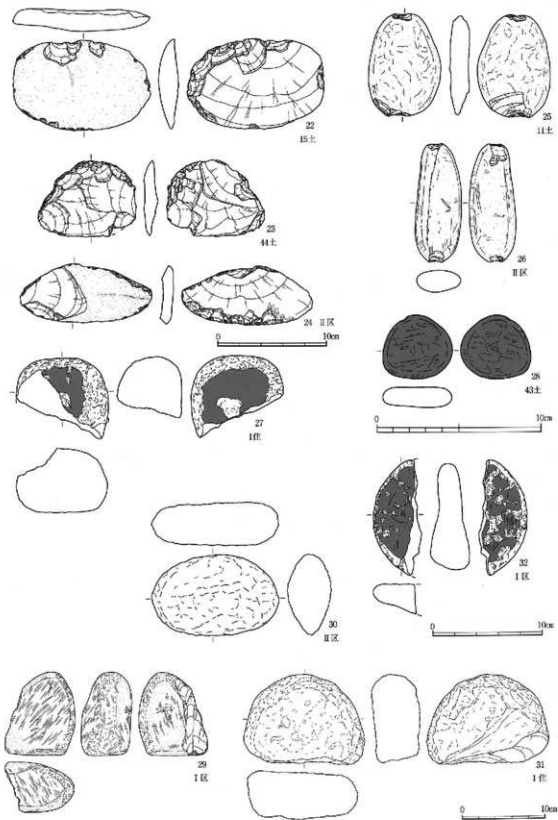


図45 石器(3) (25・26・28は1/2、22~24・27・30・32は1/3、29・31は1/4)

第5章 調査の成果と課題

1 南割遺跡における縄文時代中期中葉の土器様相について

今回の調査で住居址や土坑から縄文時代中期中葉の土器を多数検出した。特に1号住居址(以下1号住)からは良好な資料が出土していることから、1号住の土器を中心に中期中葉の土器様相について考察を加える。縄文時代中期中葉の時期の名称については長野県史(野村 1988)に準拠する。

今回出土した中期中葉の土器には大きく分けて以下の系統が認められる。

- ・ **在地系** 八ヶ岳西南麓に分布する藤内Ⅱ式および井戸尻式土器である。図18-1や図19-2などが該当し、出土量も多く南割遺跡における在地の土器である。
- ・ **下伊那系** 飯伊地方を中心に分布する下伊那型櫛形文土器(以下櫛形文)である。口縁部に幅広い文様帯を持ち、さらに胴部下半に櫛形文を持つことを特徴とする。器壁は薄く焼成も良好である。図20-6~9などが該当する。1号住をはじめ土坑からも多数の櫛形文土器が出土している。また下伊那型の櫛形文土器の祖形と考えられる平出三類A土器(以下平出三A)もここに含むこととする。平出三Aとしては図19-3などが挙げられる。出土量は少ない。
- ・ **東海系** 東海地方に分布の中心を持つ土器である。口縁部の文様帯が狭く小さな波状突起を持ち、細かな爪形文や押し引き文が施されていることを特徴とする。図21-10~13などが該当し、山田平式末~北屋敷式に該当すると思われる。図21-10・11は胎土や色調などから搬入品の可能性が高い。

このほかに各系統の要素が混ざった土器が見られる。図19-4は胴部下半に半円弧状に隆帯が貼付されており櫛形文土器の特徴を持つが、口縁部が大きく開く器形、尖り気味の波状突起および口縁部の文様帯の構成要素など東海系の影響も見られる。半円弧状の隆帯で区画された中が無文であることも特徴的である。図21-14・17は櫛形文土器の形状であるが、器壁が厚く焼成が甘いという在地系土器となっている。さまざまな要素が混在する土器の存在は、地域間の交流などを考えるうえで重要な点であると考えられる。

1号住における各系統の土器の出土比率をみると、在地系と下伊那系(櫛形文土器)がほぼ1:1となり、平出三Aは少ないという特徴がある。飯島町の山溝遺跡や町谷遺跡では、平出三Aは中期中葉Ⅳ期(藤内Ⅱ式)まで在地系の土器とともに出土量の主体をなすが、Ⅴ期に入るとともに急激に減少し、櫛形文が主体となっていく傾向がある。下伊那系の土器が主体となる傾向はさらに続き、後葉に入ると下伊那系の土器が在地の土器となっていく。

櫛形文は在地系土器と比べると器壁が薄く、色調や焼成も大きく異なる。これらの櫛形文が南割遺跡周辺で作られたものか、運ばれてきたものかは今後の分析に委ねるところが多いが、搬入品の可能性がある東海系の土器の存在とも合わせ、複数の地域の土器がいくつも見られることは間違いなく、南割遺跡が東海地方から下伊那地方を通りさらに北上する土器の経路上に位置するという特徴を顕著に現わしているといえよう。

2 土坑について

本遺跡からは縄文時代中期中葉から後葉にかけての土坑が合計50基検出された。出土した土器より土坑の時期が推定されるのは20基で、いずれも縄文時代中期と考えられる。詳細を見てみると縄文時代中期中葉が9基、中葉末が3基、中葉末～後葉が3基、後葉が5基で、中葉のものが多かった。

中葉の土坑群の中で在地系の土器である藤内Ⅱ式が出土したのは7号土坑と12号土坑である。5号土坑、11号土坑、24号土坑、44号土坑、54号土坑からは下伊那型橋形文土器が出土し、東海系の土器が共存する場合が見られる。後葉の土坑群からは細隆線文土器が出土している。52号土坑からは細隆線文土器に下伊那タイプの深鉢形土器が共存している。土坑群の中で最も新しいのは16号土坑で、東海系の咲煙式土器が出土している。

検出した土坑群のうち16基の土坑において集石が見られ、また土坑の底に石が置かれていたものが4基あった。火を受けた礫が含まれていた土坑は南東土坑群に位置する3基のみであった。集石は土坑上層に複数の扁平な石が置かれているものが多かったが、特殊な例も見られた。10号土坑では土坑底部に石が敷かれ上層には礫が覆っており、15号土坑では壁に沿って石が配置されていた。また52号土坑では内部にぎっしりと礫が入っていた。

広い面積で土坑を確認した南東土坑群で土坑の位置関係を検討すると、集石や底に石を持つ土坑がいくつかのまとまりになっている傾向が見られた。38号土坑周辺では35号土坑、36号土坑、39号土坑の4基が接し、40号土坑周辺では42号土坑、43号土坑の3基が近接している。10号土坑周辺では11号土坑、14号土坑、32号土坑の4基が、15号土坑周辺では16号土坑、21号土坑の3基が近接していた。最も時期が古い7号土坑(藤内Ⅱ式)は単独で位置している。同じグループ内で土坑の時期を見てみると、15号土坑のグループでは15号土坑が中期中葉、16号土坑が後葉となっている。また40号土坑のグループでは40号土坑が中葉末、42号土坑が後葉となっており時期差が見られる。

土坑群の性格として考えられるのは墓坑、再葬墓、貯蔵穴などが挙げられる。規模が1mクラスのもので土坑上面および内部に土器や石器などの遺物が見られる7号土坑、11号土坑、15号土坑、40号土坑、52号土坑は墓と考えられるが、科学分析を行っていないことから断定はできない。16号土坑は64cm×55cmと小型であるが、上部に扁平な礫を持ち東海系の咲煙式土器の口縁部が正位で出土している(図30-1)。また覆土内には多量の炭化物を含んでいることから再葬墓の可能性が高い。火を受けた礫が含まれている10号土坑も墓などに付属する施設である可能性が高い。

前述で触れたように集石を持つ土坑グループ内には必ず墓と推定される土坑が含まれていることは注目される。遺物の出土状況が乏しいものについては屋外貯蔵用施設などの可能性も考えられるが、ほとんどの土坑は性格不明である。

南遺跡跡の中心は今回調査した区域よりさらに北西側であることが推定されている。南西土坑群と南東土坑群の間は圃場整備により削平されているが、縄文時代中期には大きな土坑群を形成していた可能性が大きい。南遺跡跡では、一般的な縄文時代の集落に見られる環状あるいは馬蹄形をなす住居址群の内側に土坑群を持つという形態とは異なっていたことが伺える。

3 1号土坑出土の土偶について

今回の調査で1号土坑内から伊那谷において類例がない有機物が塗布された土偶が出土した。1号土坑

は1号住居址の北側に単独で位置しているが、圃場整備による削平が著しいことから土坑が造られた当初、周辺にはかの施設が存在したかは不明である。土偶は頭部、腕部、脚部が欠損し、腰部より二つに折れた状態で出土した。土偶の形状は縄文時代中期後葉の伊那谷に盛行する「有脚尻張り立像土偶」に類似しているが、当該期のものと比べると臀部の張りが少なく、やや先行する可能性が高い。土偶の右側半身には有機物が付着していたが、付着範囲が体の表面と側面、一部欠損した右脚部断面に限られることから意図的に塗布されたものと考えられる。また腰部断面には有機物が付着していなかったことから、塗布後に折られたと考えられる。有機物の分析をおこなったが、現段階では塗布された物質を特定できず、土偶がどのような意図をもって埋められたかは不明である。

参考文献

- ・飯島町 1990 『飯島町誌 上巻 自然 原始・古代編』
- ・飯島町教育委員会 1975 『町谷』
- ・飯田市上郷考古博物館 2004 『伊那谷の土偶』
- ・飯田市教育委員会 1999 『大門原遺跡』
- ・飯田市教育委員会 2003 『城陸遺跡』
- ・静岡県考古学会 1988 『静岡県考古学会シンポジウム'97 第5回東海考古学フォーラム 縄文時代中期前半の東海系土器群』
- ・長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那飯島町内その3・駒ヶ根市 山溝遺跡』
- ・野村一寿 1988 『縄文中期の土器』『長野県史 考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物』長野県史刊行会

表2 土坑一覧表

径径・径径・深さ内の()は遺存数

I区土坑

No.	径径(cm)	径径(cm)	深さ(cm)	時期	備考
1号土坑	(33)	(15)	9	中期中葉末～後葉	土偶1点
5号土坑	(24)	(7)	8	中期中期	

南東土坑群

No.	径径(cm)	径径(cm)	深さ(cm)	時期	備考
7号土坑	116	90	42	中期中葉	仏石あり
8号土坑	64	50	14		
9号土坑	66	43	9		
10号土坑	108	63	30		集石あり 焼けた石を含む。
11号土坑	84	78	28	中期中期	集石あり 二次加工割片1点・打製石斧1点・石鏃1点
12号土坑	39	35	11	中期中期	
13号土坑	-	-	-		欠番
14号土坑	62	32	24		底に石
15号土坑	100	94	32	中期中期	集石あり 焼けた石含む 横刃形石器1点
16号土坑	64	55	25	中期後葉	集石あり 焼けた石含む
17号土坑	33	31	12		
18号土坑	44	35	12		
19号土坑	(84)	58	10		
20号土坑	43	34	8		
21号土坑	72	66	10		集石あり
22号土坑	-	-	-		欠番
23号土坑	-	-	-		欠番
24号土坑	41	33	13	中期中葉	
25号土坑	45	38	11		
26号土坑	(40)	35	12		
27号土坑	51	48	20	中期後葉	
28号土坑	52	46	28		
29号土坑	38	33	23		
30号土坑	51	39	19		
31号土坑	65	32	12	中期中葉末～後葉	
32号土坑	60	58	15		底に石
33号土坑	46	37	11		
34号土坑	100	66	13	中期中葉末～後葉	
35号土坑	(78)	(52)	27		
36号土坑	75	(65)	15		集石あり
37号土坑	70	50	18		
38号土坑	68	68	15		集石あり
39号土坑	(36)	(48)	20		底に石
40号土坑	80	71	12	中期中葉末	集石あり
41号土坑	34	28	22		
42号土坑	54	49	16	中期後葉	集石あり
43号土坑	66	45	30	中期中葉末	集石あり 打製石斧1点・鏃石1点
44号土坑	(270)	(120)	108	中期中葉	横刃形石器1点
45号土坑	(82)	-	(36)		断面のみの確認

南西土坑群

No.	径径(cm)	径径(cm)	深さ(cm)	時期	備考
3号土坑	(41)	54	28	中期中葉末	
46号土坑	43	38	27		
47号土坑	48	45	37		
48号土坑	(89)	(71)	38	中期中葉	
49号土坑	(97)	(63)	31		集石あり
50号土坑	51	42	10		集石あり
51号土坑	(60)	46	14		
52号土坑	(125)	130	37	中期後葉	集石あり 土偶1点・打製石斧2点
53号土坑	75	53	27	中期後葉	集石あり 打製石斧1点
54号土坑	(90)	83	8	中期中期	
55号土坑	61	60	45		底に石
56号土坑	(76)	(40)	16	中期後葉中	集石あり

表3 石器計測表

遺物番号	図番号	種別	出土地点	形態	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材
1	43-1	石頭	1号住居址		14	12	3	0.5	黒曜石
2	43-2	石頭	I区		25	20	3	1.5	黒曜石
3	43-3	二次加工割片	11号土坑		30	24	12	11	黒曜石
4	43-4	二次加工割片	I区		43	23	10	9	黒曜石
5	43-5	二次加工割片	II区		21	37	7	3	黒曜石
6	43-6	石匙	1号住居址		49	64	8	19	砂岩
7	43-7	打製石斧	1号住居址	槲櫚形	115	40	14	96	黒色片岩
8	43-8	打製石斧	1号住居址	槲櫚形	158	55	24	243	黒色片岩
9	43-9	打製石斧	1号住居址	槲櫚形	139	48	20	167	砂岩
10	44-10	打製石斧	1号住居址	分銅形	120	68	25	184	砂岩
11	44-11	打製石斧	1号住居址	分銅形	89	51	18	92	砂岩
12	44-12	打製石斧	11号土坑	槲櫚形	110	45	15	113	緑色片岩
13	44-13	打製石斧	43号土坑	槲櫚形	85	58	25	146	緑色岩
14	44-14	打製石斧	52号土坑	槲櫚形	112	42	19	111	砂岩
15	44-15	打製石斧	52号土坑	槲櫚形	100	42	18	98	砂岩
16	44-16	打製石斧	63号土坑	槲櫚形	111	47	17	124	雲母片岩
17	44-17	打製石斧	II区	槲櫚形	124	59	30	254	砂岩
18	44-18	打製石斧	II区	槲櫚形	140	46	13	131	緑色片岩
19	44-19	磨製石斧	I区	未定形	130	46	32	281	緑色岩
20	44-20	磨製石斧	II区	小型	59	26	12	34	緑色岩
21	44-21	磨製石斧	II区	小型	49	27	10	21	緑色岩
22	45-22	槲方形石器	15号土坑		82	125	13	232	砂岩
23	45-23	槲方形石器	44号土坑		70	88	12	86	砂岩
24	45-24	槲方形石器	II区		54	119	10	89	砂岩
25	45-25	石鏟	11号土坑		62	44	12	32	雲母片岩
26	45-26	石鏟	II区		73	27	13	43	緑色岩
27	45-27	磨石	1号住居址		74	84	59	411	花崗岩
28	45-28	磨石	43号土坑		39	42	13	36	片麻岩
29	45-29	磨石	I区		101	79	59	762	緑色岩
30	45-30	磨石	II区		115	73	39	500	閃緑岩
31	45-31	石皿	1号住居址		108	146	57	1410	花崗岩
32	45-32	石皿	I区		105	41	36	167	花崗岩

付編 土偶附着黒色物の材質分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

飯島町南遺跡の調査では、縄文時代中期中葉～後葉の土偶が2体分出土した。このうち1号土坑(SK01)の底部から出土した土偶の腰の前面と、脚につながる断面には黒色物が附着していた。ここでは、この黒色物について赤外分光分析・X線分析を行い附着物の材料について検討した。

(2) 試料と方法

試料は、SK01底部から出土した土偶の腰の前面に附着した黒色附着物である(図版1-2)。この黒色附着物の剥離面の観察では、光沢のある黒色物であった(図版1-3)。

表1 赤外分光分析を行った土偶とその詳細

分析遺物	遺構	時期	出土層位	出土状況	附着物の特徴	附着部位
土偶	SK01	縄文時代中期中葉～後葉	底部	土坑(あるいはピット)の底部に横倒しの状態	光沢のある黒色物	腰の前面と、脚につながる断面

試料は、典型的な黒色附着部分についてセロハンテープを押しあてて採取された試料である。分析試料は、採取された試料から手術用メスを用いて1mm角程度を採取し、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。分析は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

X線分析については、セロハンテープで剥離した試料を試料台に固定し、金蒸着を行った。測定では、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM)による二次電子像の観察を行い、エネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200)を用いて代表的な部分の化学組成について簡易定量分析を行った。

(3) 結果および考察

黒色附着物の赤外分光分析を行った結果、複数ヶ所において吸収(生漆の吸収位置に相当するNo.1、No.2、No.4、No.9付近など)が見られた(図版1-5)。

しかし、漆の成分であるウルシオールの吸収(No.6～8:表2)が全く見られないことから、これらの吸収は漆と同定できない。なお、吸収No.1とNo.2において若干の吸収が見られること、吸収No.9に劣化に伴って検出される大きな吸収が見られたことから、漆を含めた有機物の可能性がある。黒色附着物は、附着面積が比較的広く、意図的に塗布したことが予想されるが、炭化により劣化していると考えられる。

剥離面の黒色附着物のX線分析では、炭素が最大55.71%含まれ(表3)、有機物由来の黒色物であるこ

表2 生漆の吸収位置

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

とがわかる。なお、その他の元素では、酸化イオウ (SO₃) が最大31.25%、酸化マンガン (MnO) が最大21.05%、酸化鉄 (FeO) が最大20.97%などであった。

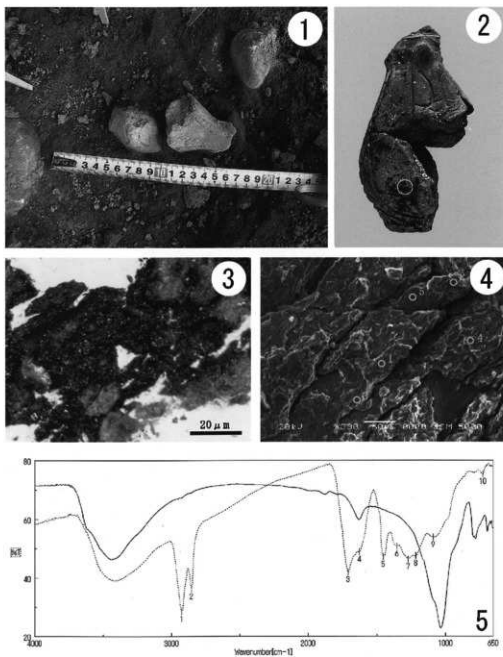
表3 付着物のX線分析結果(単位%)

試料 No	位置	点No	C	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	total
土偶	黒色部	1	44.68	—	0.40	0.01	7.93	16.35	0.27	0.55	9.40	14.21	6.21	100.01
		2	49.05	—	—	0.02	7.39	19.07	0.46	0.29	0.96	7.59	15.16	99.99
		3	55.71	—	—	—	3.57	31.25	0.15	0.42	—	4.66	4.24	100.00
		4	34.65	—	—	—	6.63	13.75	0.50	0.88	1.56	21.05	20.97	99.99
		5	43.71	—	—	—	9.08	18.62	0.33	0.34	0.56	19.97	7.40	100.01
最小値			34.65	0.00	0.40	0.01	3.57	13.75	0.15	0.29	0.56	4.66	4.24	
最大値			55.71	0.00	0.40	0.02	9.08	31.25	0.50	0.88	9.40	21.05	20.97	

(4) おわりに

SK01底部から出土した土偶の腰の前面に付着した黒色付着物について赤外分光分析およびX線分析を行った。

その結果、炭素含有量の高い物質であるが、赤外分光分析では炭化していたために、黒色付着物の種類は同定できなかった。



図版1 SK01から出土した土偶とEDS分析位置および赤外吸収スペクトル図

1. SK01から出土した土偶 2. 土偶の黒色付着物と分析試料の採取位置 (○の位置)
3. 黒色付着物の剥離面 4. 走査型電子顕微鏡による二次電子像
5. 黒色付着物の赤外分光スペクトル図

実線：黒色付着物、点線：生漆 [数字は吸収位置]

(縦軸が透過率 (%T)、横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー))

圖 版



図版1
ダム建設現場



(1) 1号住居址 (上空より)



(2) 1号住居址完掘 (北側より)



(1) 1号住居址遺物出土状況



(2) 同 出土遺物



(1) 同 出土遺物



(2) 同 3号室内遺物出土状況



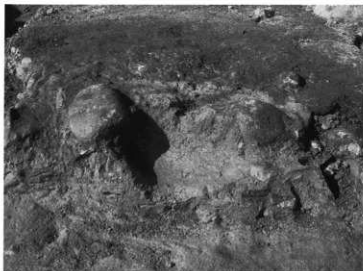
(1) 同 炉周边遗物出土状况



(2) 同 炉完掘



(3) 同 1号炉



(1) 1号土坑 (南側より)



(2) 同 土偶出土状況



(3) 5号土坑 (北側より)



(1) 南東土坑群確認状況 (東高側より)



(2) 南東土坑群確認状況 (北東側より)



(1) 南東土坑群 (上空より)



(2) 南東土坑群 (東側より)



(1) 7号土坑



(2) 10号土坑検出状況



(3) 同



(1) 11号土坑



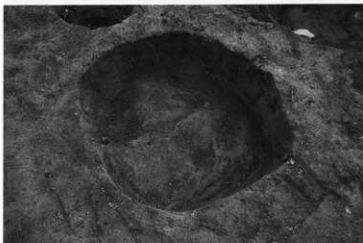
(2) 15号土坑 (左)・
16号土坑 (右)



(3) 15号土坑



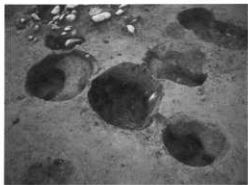
(1) 16号土坑 上面



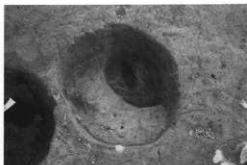
(2) 同



(3) 27号土坑周边



(1) 27号土坑周边



(2) 27号土坑



(3) 40号土坑周边